

姪浜遺跡3

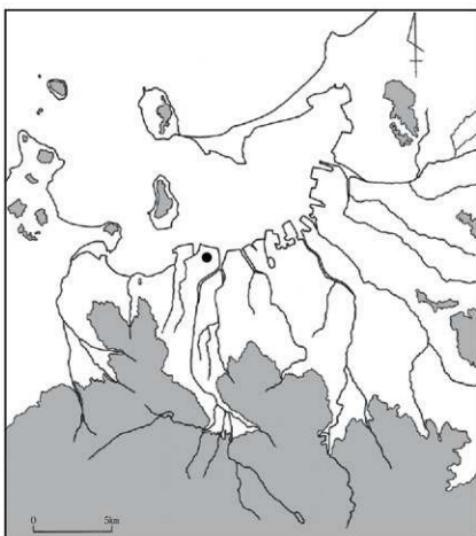
- 第4次調査の報告 -

2009

福岡市教育委員会

姪浜遺跡3

- 第4次調査の報告 -



遺跡略号 M NH-4
調査番号 9844

2009

福岡市教育委員会

序

福岡市の西部地域は昭和57年の地下鉄1号線開通、平成17年の地下鉄3号線開通以来都市化が進み、特に1号線沿線は全線で大規模なマンションが林立する光景となっています。福岡市教育委員会では、これらの再開発について、遺跡の存在するところについては事前に発掘調査を実施しており、西部地域の西新町遺跡で22次、藤崎遺跡で36次の発掘調査を実施しています。

1号線の終着駅である姪浜地区においても再開発が進んだものの、姪浜遺跡のある地点が江戸時代の唐津街道沿いで、昭和期まで開口の狭い奥長の民家が密集していたために再開発が遅れていたところです。その景色は、かつての姪浜宿のにぎわいを示す歴史的な景観でもありました。

しかしバブル期以降、ここにもマンション化の波が押し寄せ、その様相が変わってきたところです。今回報告する調査は、これら的小規模な開発に伴って行われた事前の発掘調査です。調査面積こそ100m²強の小さなものです、甕棺5基を中心として約100箱の弥生時代遺物が出土し、中でも20点を超す石錘の出土が、海岸近くにある当遺跡の性格を物語っているのではないかと思います。

調査・報告に当たっては、快く発掘調査を承諾していただきました土地所有者の方、調査でご協力を頂いた西海建設、地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

本書が文化財保護のため少しでも役に立ち、また学術研究の一助になりましたら幸いです。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

例　　言

- 1 本書は、住宅建設に伴って福岡市教育委員会が平成10年度に行った姪浜遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
- 2 検出した遺構の番号は通し番号とし、番号の前に種類を表す以下の記号を付した。
SE：井戸 SK：土坑 ST：甕棺墓 SX：不定形土坑
- 3 本書に用いた方位はすべて磁北である。
- 4 遺構の実測及び写真撮影は米倉秀紀が行った。
- 5 遺物の実測は米倉・撫養久美子（福岡市技能員）・山崎賀代子（同）が行った。
- 6 製図及び遺物の写真撮影は米倉が行った。
- 7 本書の編集・執筆は米倉が行った。
- 8 付編として姪浜遺跡第2次調査の概要報告を掲載した。
- 9 本書の記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターで保管される。

調査番号	9844	遺跡略号	MNH-4	分布地図番号	89-0376
調査期間	平成10年11月4日から26日	住所	福岡市西区姪浜3丁目3393		
敷地面積	212m ²	調査対象面積	140m ²	調査面積	119m ²
原因者	個人	調査面積	119m ²	出土遺物量	95箱

本 文 目 次

I 調査の経緯.....	7
1 調査に至る経緯.....	7
2 調査体制.....	7
II 姫浜遺跡の位置と環境.....	8
1 立地.....	8
2 姫浜遺跡の既往の調査.....	9
III 調査の記録.....	10
1 調査の概要.....	10
2 編序.....	11
3 遺構と遺物.....	11
IV まとめ.....	31
付 姫浜遺跡第2次調査概要報告	37

挿 図 目 次

図1 姫浜遺跡位置図 (1/40,000)	7
図2 姫浜遺跡の調査区と周辺砂丘位置図 (1/3,000).....	8
図3 姫浜遺跡第4次調査位置図 (1/800)	9
図4 姫浜遺跡第4次調査遺構配置図 (1/100)	10
図5 ST09 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/8)	12
図6 ST11 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/6)	13
図7 ST17 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/6)	14
図8 ST23・ST24 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/6)	15
図9 SK03及び同土層断面実測図 (1/60)	16
図10 SK03出土遺物実測図1 (1/4)	17
図11 SK03出土遺物実測図2 (1/4・1/3)	19
図12 SK04及び同土層断面実測図 (1/60)	20
図13 SK04出土遺物実測図1 (1/4)	21
図14 SK04出土遺物実測図2 (1/4)	22
図15 SK04出土遺物実測図3 (1/4)	23
図16 SK04出土遺物実測図4 (1/4・1/2)	24
図17 SK04出土遺物実測図5 (1/3・1/2)	25
図18 SK04出土遺物実測図6 (1/3・1/2)	26
図19 SK08 (1/40) 及び同出土遺物実測図 (1/4・1/3)	27
図20 SK12~16・18~22実測図 (1/40)	28
図21 SK25出土遺物実測図 (1/4)	29
図22 SE01出土遺物及び攪乱等出土遺物実測図 (1/4・1/3)	30
図23 攪乱・試掘出土遺物実測図 (1/4・1/3)	32

図24	擾乱出土遺物実測図（1/3）	33
図25	姪浜遺跡第2次調査遺構配置図及び遺構図（1/2,000・1/80）	38
図26	姪浜遺跡第2次調査出土甕棺模式図	40

表 目 次

表1	遺構一覧	11
表2	出土土器一覧	34
表3	出土石器一覧	36
表4	姪浜遺跡第2次調査甕棺一覧	39

図 版 目 次

図版1	①調査区全景（南から） ②調査区全景（北から）	41
図版2	①ST09（北から） ②ST11（北から） ③ST11甕棺取上後（北から）	42
図版3	①ST17（南から） ②ST23（南から） ③ST24（北から）	43
図版4	①SK03（東から） ②SK03土層断面1 ③SK03土層断面2	44
図版5	①SK04周辺土坑検出状況（北から） ②SK04遺物出土状況（北から）	45
図版6	①SK04全景（北から） ②SK04土層断面1 ③SK04土層断面2	46
図版7	①SK08（北東から） ②SK16（東から） ③SK16人頭骨出土状況	47
図版8	出土遺物1	48
図版9	出土遺物2	49
図版10	出土遺物3	50
図版11	出土遺物4	51
図版12	出土遺物5	52
図版13	第2次調査の状況	53
図版14	第2次調査甕棺出土状況	54

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成10年7月29日付で個人から福岡市教育委員会に福岡市西区姪浜3丁目3393における埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姪浜遺跡内で、第1次・第2次調査で甕棺群等が発見された近隣であるため、同年10月6日に試掘調査を行った結果、弥生土器を含む土坑が検出されたため発掘調査を実施した。

2 調査体制

平成10年度（発掘調査）	調査主体	福岡市教育委員会文化財部 埋蔵文化財課長 柳田純孝 同課第1係長 二宮忠司 調査担当 米倉秀紀 庶務担当 文化財整備課管理係
平成20年度（整理報告）		文化財部埋蔵文化財第1課 課長 山口謙治 報告 米倉秀紀 庶務 文化財管理課管理係



図1 姪浜遺跡位置図 (1/40,000)

弥生時代～古墳時代初頭の主要遺跡

- ①姪浜遺跡
- ②石丸古川遺跡（凸蒂文期の低湿地）
- ③福重樅木遺跡（板付期の低湿地）
- ④有田遺跡（各時期の集落・墓地）
- ⑤原遺跡（弥生中期・後期の集落）
- ⑥藤崎遺跡（甕棺群・方形周溝墓群）
- ⑦西新町遺跡（甕棺群・古墳初頭の集落）
- ⑧五島山古墳（前期古墳・船載鏡出土）

II 姪浜遺跡の位置と環境

1 立地

姪浜遺跡は、福岡市西部に広がる早良平野の入り口、2級河川室見川の西にあり、博多湾に面する新期砂丘上に立地する。姪浜近辺の博多湾岸には、愛宕山や小戸の丘陵など第三系の丘陵が点在しており、その間をつなぐように砂丘が形成されている。小戸の東側が姪浜砂丘、西側が生の松原砂丘で、縄文海進後の海退時に形成されたものと考えられる。同様の時期の砂丘は博多湾岸に随所に見られ、西区今山遺跡では砂丘の下から縄文時代前期の土器が、砂丘層の中から中期末前後の土器が出土している。西新町遺跡でも砂丘層の下から縄文時代前期の土器が出土しており、他地区の状況等も合わせて考えると、砂丘の形成が縄文時代中期末～後期初頭前後の時期と考えられる。

これらの砂丘列の背後には後背湿地が形成され、姪浜以南には広い低平な湿地が広がっている。さ

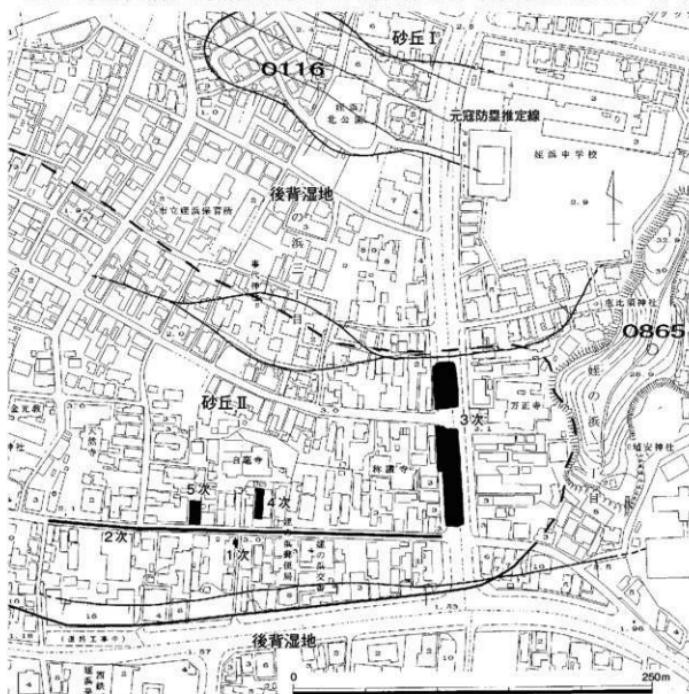


図2 姪浜遺跡の調査区と周辺砂丘位置図 (1/3,000)

らにその南側には河成の沖積低地が形成されているが、この低地には橋本一丁田遺跡、福重稻木遺跡・石丸古川遺跡（十郎川遺跡）など突蒂文土器から板付式土器が出土する遺跡があり、初期水田が存在する可能性も考えられる。

一方姪浜遺跡が乗る砂丘の前面に、もう一つ砂丘列が形成されている。元寇防塁がこの砂丘上を走っていると考えられ、弥生時代以降鎌倉時代以前に形成された砂丘列である。同様の砂丘列は藤崎遺跡・西新町遺跡・博多遺跡などでも確認でき、すべて元寇防塁が築かれている。前記今山遺跡では弥生時代～古墳時代前期の土器を覆うような風成砂層が確認されており、この砂層の上から10世紀のドックを掘りこんでおり、少なくとも今山遺跡では古墳時代中期頃から平安時代前半までの間に時期と確認できる。姪浜遺跡の2本の砂丘列の間は前面砂丘の後背湿地になっている。

早良平野北部で姪浜遺跡の中心時期である弥生時代中期の遺跡を見ると、前半代は吉武高木遺跡を始めとする墓地は顕著な遺跡が認められるが、集落はあまり判然としない。中期半ばになると有田遺跡・原遺跡を始めとした大規模な集落が出現し、海岸部の藤崎遺跡などにおいても豪奢墓が大幅に増加してくる。姪浜遺跡では、藤崎遺跡と同様に多くの豪奢墓を有しているとともに、大量の石鍤や製塙土器片が出土しており、海岸端の生活址として重要である。

2 姪浜遺跡の既往の調査

姪浜遺跡では今回の調査も含めて5回の調査が行われている。このうち、第2次調査は当調査区の前面道路に敷設された下水道工事に伴う調査であるが、工事中に発見された不時発見の調査で、さら



図3 姪浜遺跡第4次調査位置図 (1/800)

に冬期の夜間調査であったことから、記録も十分取れずに未報告であることから、今回卷末に調査概要を掲載している。以下、調査の概要である。

第1次調査(7105) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集。工事中に壺棺発見。中期後半の壺棺2基、土器・石器を採集。

第2次調査(7907) 下水道敷設に伴う立会調査。数十基に及ぶ壺棺群。(本書に概要報告)

第3次調査(9252) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集。道路拡幅に伴う発掘調査。弥生時代中期から古墳時代後期の住居址・土坑・壺棺を検出。弥生時代の製塙器・石戈未製品などが出土。

第4次調査(9844) 本書報告。弥生時代中期の大型土坑、壺棺5基などを検出。

第5次調査(0631) 弥生時代の住居2軒の他、石蓋土壤墓1基などが見つかっている。

III 調査の記録

1 調査の概要

調査は平成10年11月4日に重機による表土剥ぎから開始した。調査地の前面道路は江戸時代の唐津街道で、調査地周辺は宿場町として町屋街が形成されていたところであり、調査地内も江戸時代の井戸や土坑が多く確認された。まずこれらの遺構群を掘削した結果、それらの間や下から弥生時代の土坑や壺棺墓を検出した。弥生時代の土坑は不定形かつ大型のものが多く、そのいずれもから多くの土器が出土した。弥生時代の遺構群以外に、調査区西端で人骨の頭頂部のみが出土したが、その後の精査によりわずかに壠方が確認でき、種々の状況から中世の土壤墓ではないかと考えられる。確認できた遺構群の調査終了後に、地山である白砂層を重機によりだめ押しを行った結果、弥生時代小児棺1基を見つけた。精査したが、壠方は全く分からなかった。

最終的に検出したのは、江戸時代井戸3基・同不定形土坑数基(複合的に連結し正確な数は読みとれない)、中世土壤1基、弥生時代中期大型土坑2基、同土坑11基、溝2条、壺棺墓5基である。

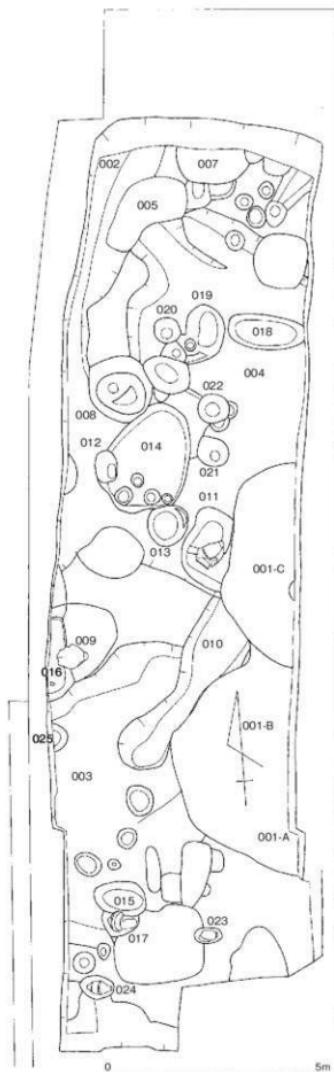


図4 岸浜遺跡第4次調査遺構配置図 (1/100)

2 層序

調査区内全域に近代以降の盛土が覆い、その厚さは50~100cmに及ぶ。その下に江戸時代遺物を含む混砂土層がある。地山である砂丘面が北に傾斜しているため、江戸時代の層は北に厚く、南に薄い。本来ならこの下に砂丘面の腐食層（いわゆるクロスナ層）が存在した可能性が高いが、現状では腐食層は全く存在せず、江戸時代の層は地山の黄白色細砂層に凹凸状に食い込んでおり、地山面は江戸時代以降に削平されている。

3 遺構と遺物

検出遺構は、表1のとおりで、弥生時代の壺棺5基・大型土坑2基・小溝2条、大型土坑の底面で検出したものも含めた中小の土坑は12基を検出した。また江戸時代の遺構で明瞭なものは井戸3基である。このほか、江戸時代や近代以降の土層の中からも弥生時代遺物の他、古墳時代や中世の遺物が出土した。弥生時代の遺構と遺物を中心に、一部江戸時代についても報告を行う。

(1) 壺棺

ST09（図5、図版2）

調査区西壁際中央付近で検出した成人棺である。大半を搅乱で破壊されており、残存しているのは壺の約1/4ほどである。壺方もほとんどわからない。ほぼ東西を向いている。壺棺の破片は調査区北側のSK08上部とその周辺の搅乱からも出土しており、壺棺を破壊した土を北側に押しかけたと思われる。この壺棺の南側に別の掘り込みがあり、その中から人骨の頭頂部が出土した。頭頂部は掘り込みの床面近くから出土した。遺存状況は良くない。ST09の入骨が搅乱によって飛び出したものとも思われるが、この掘り込みは、江戸時代以降の土混じりの砂ではなく、比較的きれいな淡褐色の砂で

表1 遺構一覧

No.	種類	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	断面形	深さ(cm)	時代	備考
001	井戸	3基の重なり	—	—	—	—	江戸時代後期	3基、内1基は瓦積み
002	溝	—	不明	不明	逆台形?	45	弥生時代?	
003	土坑	不定形	不明	740	皿形	25	弥生時代	切り合い多数
004	土坑	不定形	6m以上	4m以上	皿形	25	弥生時代	切り合い多数
005	搅乱	—	—	—	—	—	近代以降	
006	搅乱	—	—	—	—	—	近代以降	
007	搅乱	—	—	—	—	—	近代以降	
008	土坑	円形	156	146	2段	124	弥生時代	土層は互層
009	壺棺	不明	不明	不明	不明	60	弥生時代	成人棺、遺存悪い
010	溝	—	—	70	皿形	14	弥生時代	
011	壺棺	略長方形?	182	不明	2段	90	弥生時代	板石に埋まる
012	土坑	楕円形	73	49	逆台形	53	弥生時代	
013	土坑	円形	97	94	逆台形	57	弥生時代	
014	土坑	卵形	266	194	皿形	39	弥生時代	
015	土坑	楕円形	120	85	逆台形	62	弥生時代	
016	土坑	長方形?	不明	不明	逆台形?	—	中世?	頭骨出土、墓?
017	壺棺	—	82	不明	略逆台形	45	弥生時代	小児棺、壺+壺
018	土坑	楕円形	約180	80	逆台形	39	弥生時代	
019	土坑	楕円形?	127	88	逆台形	74	弥生時代	
020	土坑	円形	60	58	逆台形	60	弥生時代	
021	土坑	円形	78	68	逆台形	42	弥生時代	
022	土坑	円形	70	70	逆台形	41	弥生時代	
023	壺棺	長椭円形	65	37	略逆台形	15	弥生時代	小児棺
024	壺棺	楕円形?	80?	55?	不明	35	弥生時代	小児棺、壺+壺
025	土坑	不明	不明	不明	不明	—	弥生時代	HINo. 土坑A

壺棺は墓坑の規模

あり、中世の土壙墓または木棺墓の可能性もある。

出土遺物（図5）

1は甕で、口縁部と胴部以下は接合しない。またST09とSK08上部出土の破片が接合している。推定口径35.4cm、器高45.6cmを測る。胴部から口縁部はゆるやかに湾曲している。胴部内面に数条の細い沈線状の凹みがある。調整時の砂粒の移動によるものと思われるが、内面はていねいにナデあげているため、明確ではない。両面とも明るい橙色を呈しているが、内面の胴部中央付近に指先大のやや白い部分が径20cmの範囲に20前後ある。両面とも丁寧にナデで仕上げている。

ST11（図6、図版2）

調査区中央付近で検出した。堀方の最も遺存している部分から考えて、遺構北東側の1.2m以上が破壊され、甕も一部が破損している。単柵であるが、甕の口縁部部分下・南側の横及び下に石材を据え、南側のみ二重に据えている。本来は北側にも石材があったものと思われる。また下の石材は本来は蓋石で、倒れた際に下にずれ込んだ可能性もあるだろうか。あるいは別に蓋石をしていた可能性も考えられる。堀方床面は二段で、掘削後一部を埋め戻して甕の口縁部分に扁平な石材を置いた後に甕を据えている。堀方の最も深い部分で、深さ約1.9mを測る。東西方向から20°傾いている。

出土遺物（図6）

2は器高45.6cm、口径35.4cmを測る甕である。外面には煤が付着しており、日常土器の転用である。

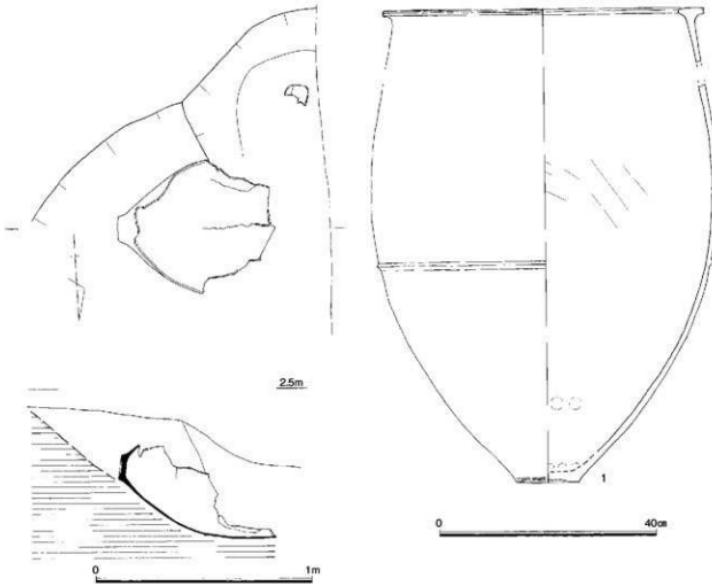


図5 ST09 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/8)

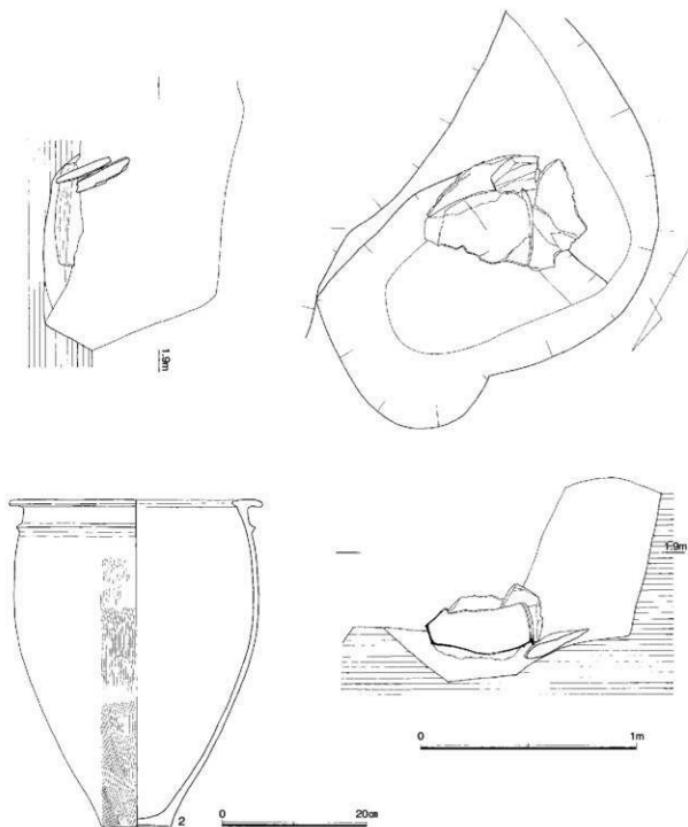


図6 ST11 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/6)

外面はほぼ全面に縦方向のハケメを施しているが、口縁部から胴上部はナデ消している。内面はナデで仕上げている。

ST17 (図7、図版3)

調査区南側で検出した。主軸は東西方向から78°傾いている。壺と甕の合わせ口の小児棺である。甕は上甕の一部が破壊されている以外はほぼ完存している。下甕は壺の口縁部を打ち欠き、埋置した下側の底部近くを5~7cmほど焼成後に穿孔している。上甕は日常土器の甕を利用している。壠方は

ほぼ壺の大きさにあわせて掘削している。

出土遺物（図7）

3は上壺で、器高39.4cm、口径31.4cmを測る。外面に煤が付着する日常土器の転用品である。外面には縦方向のハケメを施し、内面は横ナデで仕上げている。4は下壺で、口縁部を全周打ち欠いている。器高41.8cm、打ち欠いた部分の径20.8cmを測る。外面はケズリに近いヘラナデを施している。内面は剥落が多いが、ナデと思われる。色調は特に胴部下半が黒褐色を呈している。胴下部に大きさ5~10cm大の焼成後の穿孔が施されている。

ST23（図8、図版3）

調査区南端近くで検出した。埋置された壺の上部は大半が破壊され、壠方も残存部分はわずかで、残っている部分は壺棺よりわずかに大きい。主軸はほぼ東西方向を向いている。

出土遺物（図8）

5は壺で、器高53.3cm、口径36.8cmを測る。外面に煤が付着する日常土器の転用品である。両面とも器面の剥落が多いが、全面ナデで仕上げている。底部は極端な上げ底である。

ST24（図8、図版3）

当初の遺構検出ではわからずに、調査終了時前に行つたため押しで検出した小児棺である。合わせ

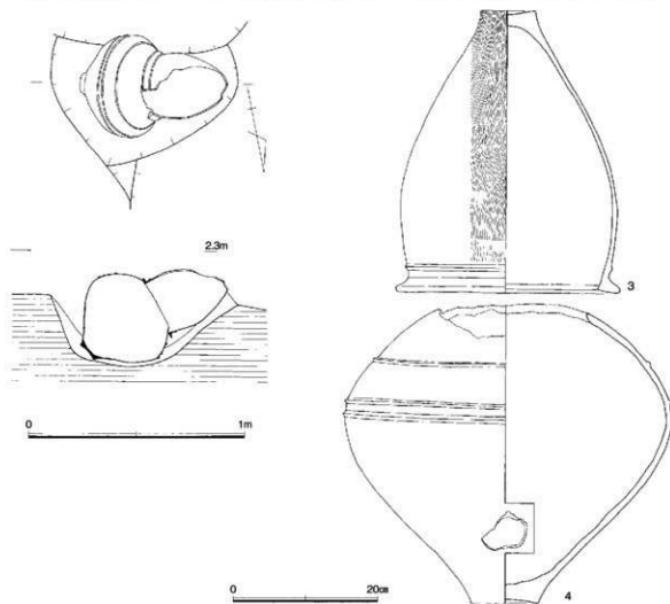


図7 ST17 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/6)

口の上下の壺はほぼ完存している。上壺・下壺は胴部の突帯等一部を除いてほぼ同形態の、土器を使用している。堀方内の埋土と地山の黄白色細砂の区別がほとんどつかず、堀方は明確ではない。壺棺は約30°の角度で埋められ、主軸は東西方向と約75°ずれている。またこの壺棺の下に、壺棺に接するように日常土器の壺の口縁部片が検出された。偶然に混入したものか。

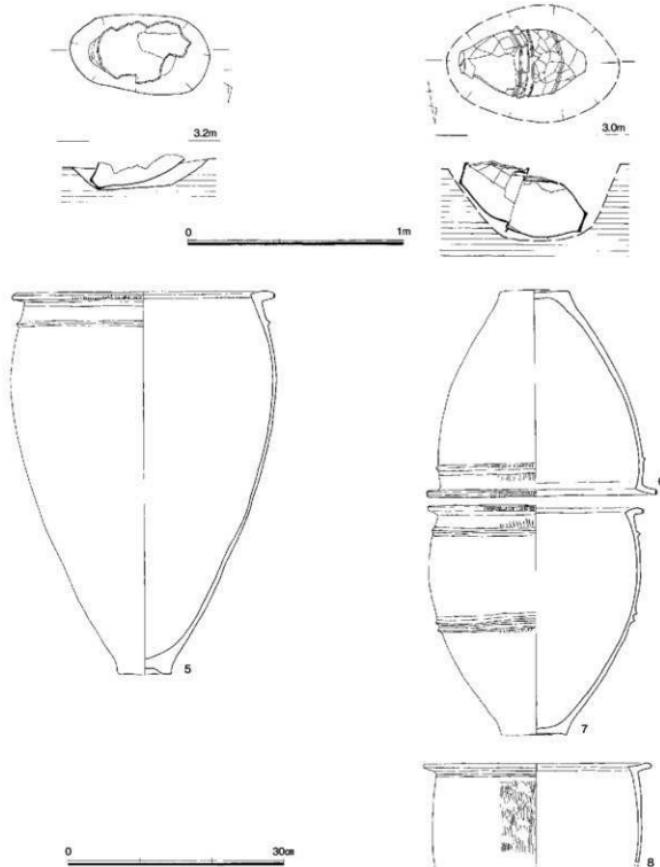


図8 ST23・ST24 (1/20) 及び同出土遺物実測図 (1/6)

出土遺物（図8）

6は上壺で器高38.8cm、口径32.2cmを測る。外面はミガキに近いヘラナデで仕上げているが、口縁部と突帯の間だけハケメが残っている。口縁部と突帯には刻目が施されているが、刻みの深さはかなり浅い。色調は顔料を施したような明橙色を呈しているが、外面下部と内面は黒ずんでいる。また底部に黒斑がある。7は下壺で器高31.9cm、口径30.1cmを測る。上壺をややす詰まりしたような器形で、胴部にも突帯を持つ。調整もほぼ同じであるが、2箇所の胴部を貼り付ける前に板ナデを施しており、その痕跡が突帯の外に残っている。色調は上壺よりやや黒ずんでいる。8は壺棺の下の堀方内から出土した弥生土器の壺である。胴上部から口縁部の破片である。口径29.2cmを測る。外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。

（2）土坑

SK03（図9、図版4）

調査区中央屋や南西側で検出した。西側はさらに調査区外に伸びている。多くの擾乱・土坑・溝や

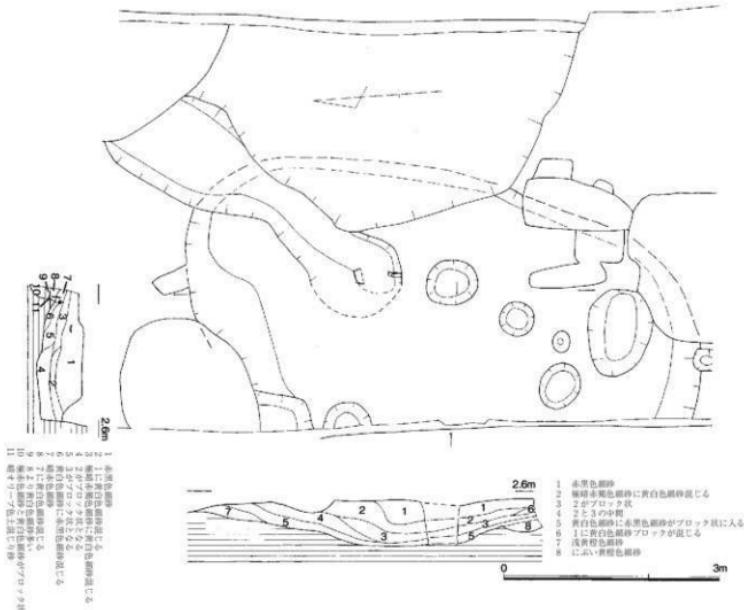


図9 SK03及び同土層断面実測図（1/60）

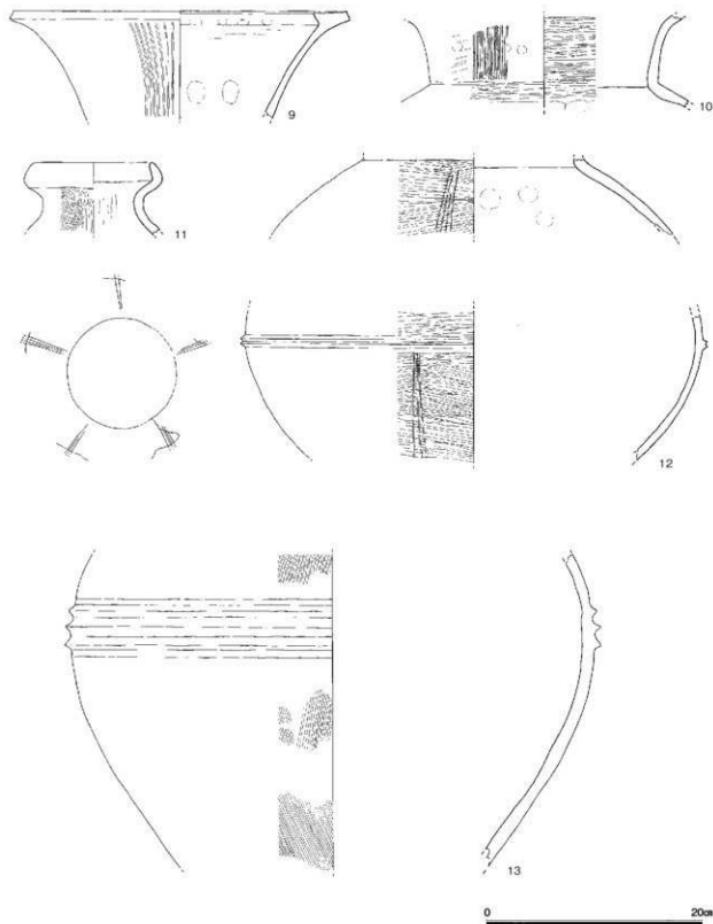


図10 SKO3出土遺物実測図1 (1/4)

ピットと切り合っている。東側はSE01に切られ、北西はSD10に切られている。また遺構の各所に小さな攪乱も切り込んでいる。さらに遺存している部分の壁面はなだらかに傾斜し、住居の壁のように直立しない。現存の深さは最も深いところで深さ約50cmを測る。長さは概ね7.2m前後を測る。埋土はレンズ状の自然堆積で、黄色から極暗赤褐色の細砂を主体に一部ブロック状を呈している。床面から上面にやや散漫に弥生土器・石器などがコンテナ5箱出土した。

出土遺物（図10・11）

9～13は弥生土器の壺である。9は広口壺で、口径30.6cmを測る。横ナデの後、ヘラによる1条7本前後の暗文を施している。暗文は図化している以外にもう1組確認でき、各暗文群の間は不均等である。また色調がやや暗い黄橙色のためか、暗文は目立たない。10は広口壺の頸部で、頸部上部にヘラ描きによる12本の暗文が施されている。外面は破片の全面に厚く、内面は口縁部に薄く赤色顔料が塗布されている。11は袋状の口縁部で、頭部以下にハケメを施している。大粒の石英・白色粒を多く含んで粗い。口径11.0cmを測る。12は多くの破片に分かれて接合していないため、一部不明確な部分がある。頸部の下と胴部の突堤から下に、鋭利なヘラ状工具で1組3～4本の長い沈線を施している。復元すると5組になるものと思われる。各沈線の間隔や各組の間隔は不均等である。顔料は塗布していないが、顔料に近い色調を呈している。13は胴部最大径49.4cmを測る。外面は縱方向のハケメの後、一部をナデしている。

14～16は弥生土器の甕である。14は口径41.6cmを測る。ナデによる擦痕が、頸は横方向、胴部は縱方向に見られる。ナデの工具は不明であるが、一部がハケメに近い状況であることから、板状工具ではないかと思われる。15は小片であるが、かなり口径の大きなもので、器壁の厚さからも、甕棺大のものと思われる。顔料は塗布していない。16は甕の底部で、底径8.2cmを測る。外底部は一度平らにした後に中心を抉っている。

17は弥生土器の高坏である。内面はヘラ研磨、外面は丁寧なナデ調整で、内面と口縁部上面には赤色顔料を塗布している。口縁端部の径24.0cmを測る。

18は土製品で、平面は円形で、片面は平坦であるが、反対面は中央が凹んでいる。平坦な面の中央に径4mm、深さ3mmの穿孔が施され、その6mmほど離れたところに径2mm強の孔と、反対面にも2mm程度の孔があるか、後2者は石粒等が脱落してできた可能性が高い。全面ナデ仕上げで、厚さ1.4cmを測る。やや淡い黄橙色を呈する。

19～23は石錘である。19は扁平な自然石の4側辺にやや大きめの抉りを入れている。長さ9.7cmを測る。20は砂岩系の石材を使用している。自然石の両側縁中央を大きく抉っている。図の表面下部は大きく剥離している。21は断面形が菱形に近く、長さは11.9cmで大きな自然石の角部分の両側縁に抉りを施している。残りの2つの角部分の側縁には紐ズレと思われる痕跡が認められる。重さ580gと重い。22は扁平な自然石の4側縁に抉りを施している。上の辺以外の抉りは小さい。23は滑石製。長さ5.4cmと小型な自然石の4側縁に抉りを施している。紐ズレによる摩耗が認められる。重さ67gである。

24は磨石で、ほぼ全面磨かれている。両面中央に敲打の跡がわずかに認められる。25は小型の砥石で、図の両面と右側縁を使用し、左側面は自然面もしくは割れた面であるが、明瞭ではない。特に図の表裏両面を多く使用し、全体が研磨によって凹み、縱方向の擦痕が多く確認できる。金属器用の携帯砥石ではないかと考えられる。

SK04（図12、図版5・6）

調査区北側で検出した。SK03と同様に大型の浅い土坑で、多くの攪乱や遺構に切られ、東側は調

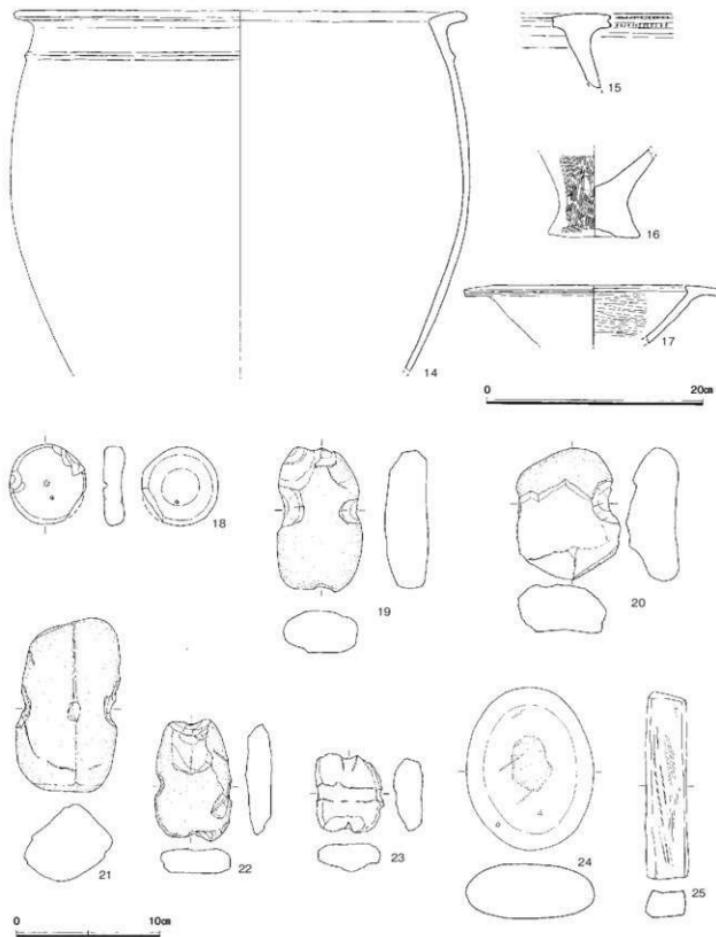


図11 SK03出土遺物実測図2 (14~17:1/4, 18~25:1/3)

査区外へ伸びるため、全体の正確な形状や大きさは判然としないが、長さは概ね7m前後を測る。きれいな円形や橢円形ではなく、出入りのある不整形を呈している。壁面はゆるやかに下降し、深さは30cm前後を測る。全体は3層に分かれる自然堆積で、暗褐色系の細砂が主体で、土などの不純物をほとんど含まない。全掘後に床面で土坑やピットを多く検出したが、この土坑に伴うものかどうかは判然としない。遺物は最上層から出土し始め、上層（土層断面の1層）下部が最も多く、その他の層位でも多く出土したが、床面での遺物量は少ない。最上層から須恵器が数点と攪乱から混じった陶磁器数点出土したが、上層下部以下では弥生時代遺物のみが出土した。石器22点を含む遺物総量は浅コンテナ約50箱分である。

出土遺物（図13～18）

26～50は弥生土器の甕である。このうち26～46は外面にハケメを施した煮炊き用の甕である。口縁部の断面形はほほく字状を呈しているが、口縁部内面の棱が明確なもの（26・27・29・38など）と接

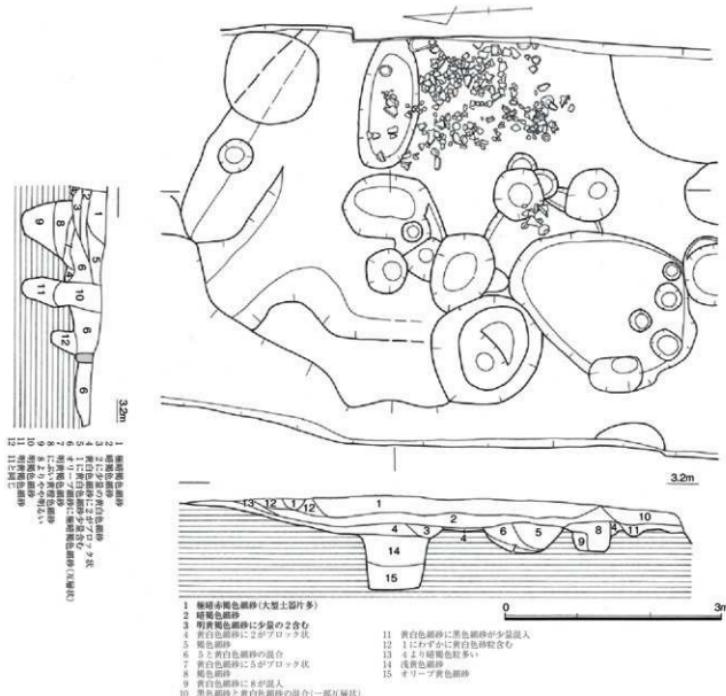


図12 SKO4及び同土層断面実測図（1/60）

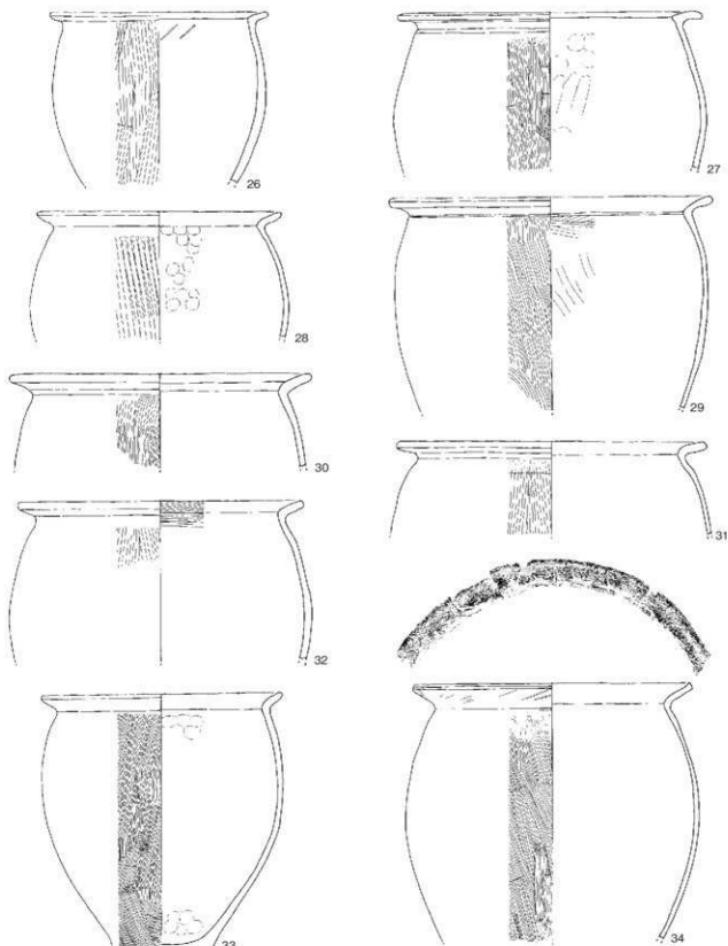


図13 SK04出土遺物実測図1 (1/4)

を成さず丸みを持っているもの（30～37など）に分けられる。また口縁部の立ち上がり角度も比較的平行に近いもの（26・27）から垂直に近いもの（38）もある。内面調整はナデ・指压さえがほとんどである。口径は200～310cmを測る。以下、特徴的な部分について個別に見る。

26は内面の調整は指压さえ・ナデであるが、口縁部直下に調整時の工具痕が残っている。27は勘先口縁で、やや胴部の張りが強い。細かい目のハケメを外面に施す。28はかなり目の粗いハケメを施している。29の内面はハケメの後ナデ調整であるが、胴部に工具痕が残っている。33は口径22.3cm、器高23.7cmのやや小型の壺である。外面にはかなり目の細かいハケメを施している。34は外面に目の細かいハケメを施した後に軽くなっている。口縁部外面には鋭利な刃物状工具でついた短い沈線が20本以上確認できる、意識的なものではなく調整時につけたものか。35は胴部は丸味を呈して、やや寸詰まりの器形である。口縁端部を摘み上げている。37は口径28.7cm、器高32.1cmを測る。目の異なる2種類のハケメ工具を使用している。38は口径31cm、胴部最大径46cmの大型の壺で、口縁部は垂直に近く立つ。口縁部と胴部の境は明瞭な稜を成している。

39～46は壺の胴部から底部である。いずれも外面にハケメを施し、内面はナデ・指压さえで仕上げ

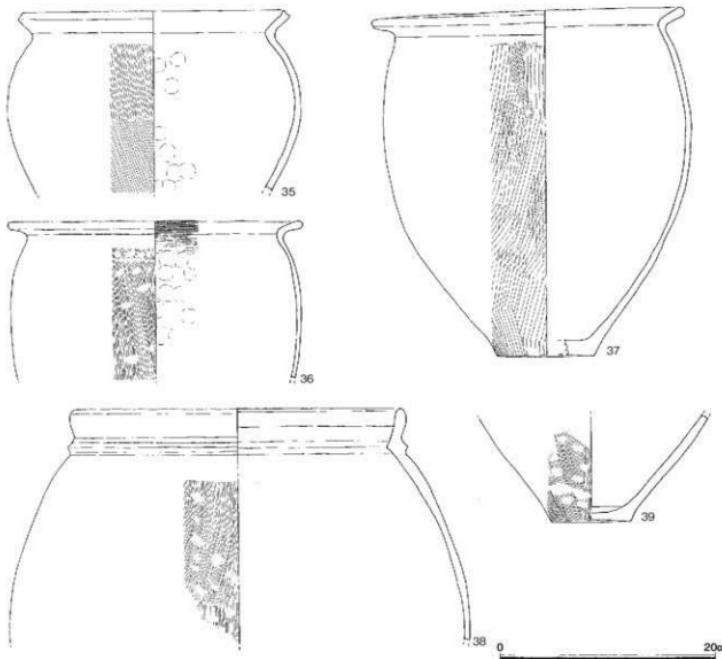


図14 SK04出土遺物実測図2 (1/4)

ている。底径7.4～9.9cmを測る。43はかなり目の細かいハケメを施している。45は長さの短いハケメを全体に施す。胴部最大径29.6cm、推定器高30cm強を測る。46は縦方向に目の粗いハケメを施す。胴部最大径32.8cm、推定器高40cm前後を測る。50は壺の底部であるが、底部に焼成前の穿孔が施されている。

47～49は赤色顔料を施した精製の壺である。47は口径26cmを測る。内面の破片下部以外は顔料が厚く残る。外面口縁部から突帯の上に、縦方向の暗文が施されている。精良な胎土で白色に近い。48は口径28.6cmを測る。47より胎土が粗く、内面胴上部はやや黒ずんでおり、顔料も胴最上部に塗布している。

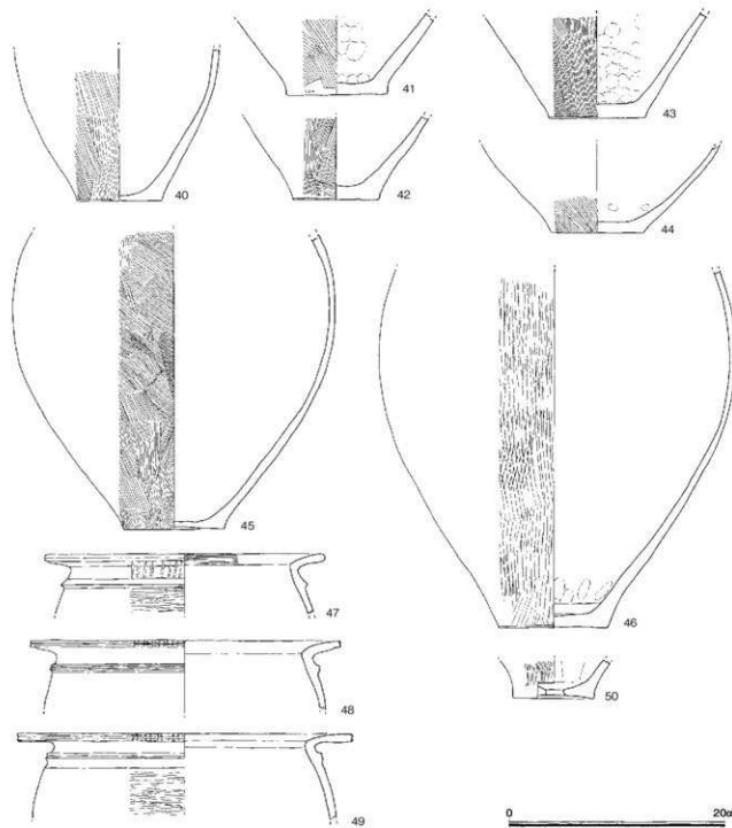


図15 SKO4出土遺物実測図3 (1/4)

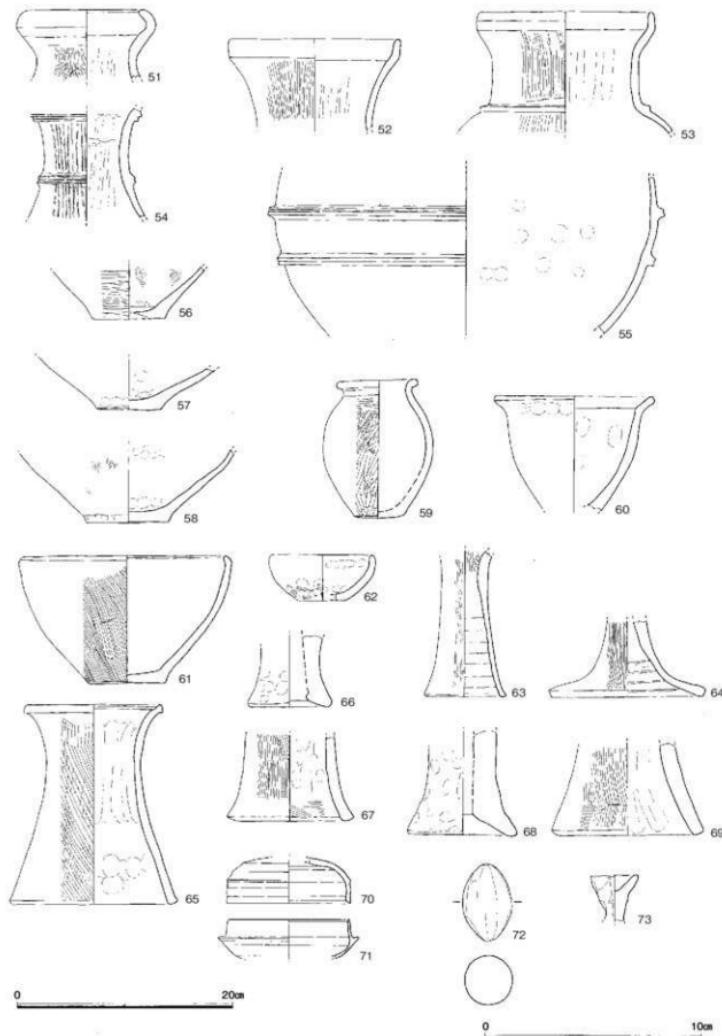


図16 SK04出土遺物実測図4 (51~71 : 1/4, 72・73 : 1/2)

いるものの、さえない赤色である。49は口径30.7cmを測る。水平に近い長い口縁部である。胎土は精良で白色を呈している。顔料は外面と内面最上部に塗布しているが、余った顔料を塗ったためか、胴上部に、ハケで部分的に塗っている。内面の調整は丁寧なナデで、外面はヘラによるケズリ気味のミガキ状である。

51～59は弥生土器の壺である。51は口径9.4cmを測り、断面形は袋状を呈する。52は口径15.4cmを測り、やや長い頸部を有する。53は口径15.6cmを測る。粗いハケメを施している。53は長頸壺で、外面には薄く赤色顔料を塗布しているようだが、内面と胎土も顔料を塗布したかのような赤色を呈してい

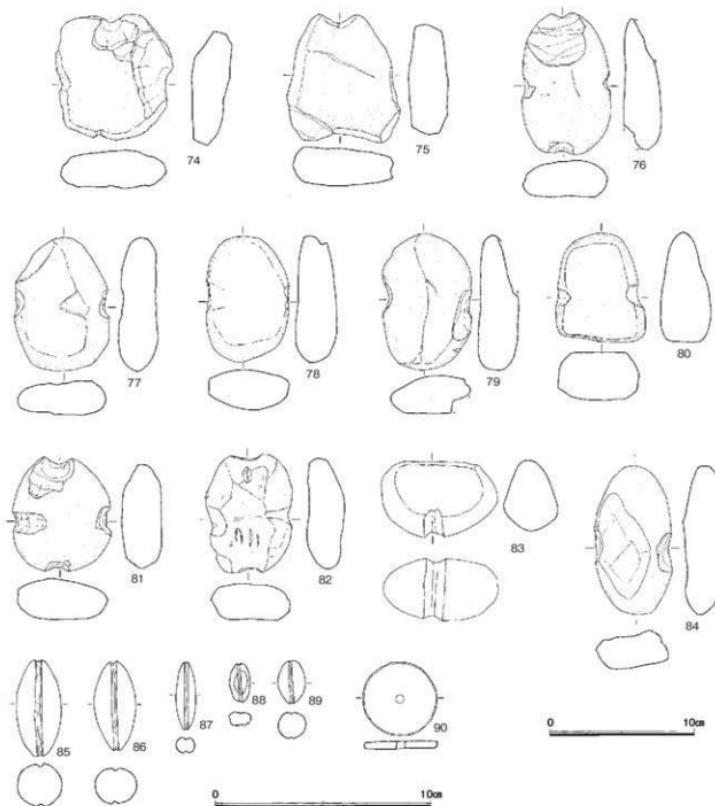


図17 SK04出土遺物実測図5 (74~84: 1/3, 85~90: 1/2)

る。外面にヘラによる暗文を破片の全面に施している。55～58は胴部・底部の破片である。59は小型の完形品で、口径7.6cm、器高12.8cmを測る。ハケメを施した後、ヘラでケズリ状になでている。

60～62は鉢形状の弥生土器である。60は全面ナデ仕上げであるが、外面の器表に長さ1～2cmの凹みが無数にある。胎土が粗いために落脱したものであろうが、内面にはまったくなく、焼成時に弾けたものと思われる。61は口径19.6cm、器高11.8cmを測る。上部の一部を欠失する。62は小型の鉢で、口径9.2cm、器高4.3cmを測る。63・64は高壺脚部であるが、器形が異なる。63はハケメを施している。64はミガキ状の外面に赤色顔料を塗布している。65～69は器台である。65は口径12.8cm、器高18.4cmを測る。68は1cmを超える厚い器壁である。72は土弾で、長さ3.5cmを測る。73は壺形のミニチュア土器で、口径2.2cm、現存の高さ2.5cmを測る。手捏ね土器である。

70・71は遺構の検出中の最上層より出土した須恵器である。他にも壺の破片が数点出土している。70は口径11.4cm、推定器高4.2cmを測る壺蓋である。長めの受け部で口唇部には段を有している。外面には自然釉が付着している。71は口径11.2cm、推定器高4.3cm前後を測る。長めの深い受け部である。内面に点々と自然釉が付着している。

74～94は石器で、74～89は石錐である。重さ200g前後以上のもの（74～84）、50g強のもの（85・86）、10g以下のもの（87～89）に分けられる。抉り部分以外の加工はほとんど成されていない。抉り部分の加工は本来77のように小さなものであったと考えられるが、その後の使用や廃棄後に抉り部が大きく剥離しているものが多い。78はかすかに紐による使用痕が認められる。74～76・81は扁平な自然石の4辺に抉りを入れている。78～80は扁平な自然石の長い方の2側辺に抉りをいたしたものである。81は後線部分がわずかに欠けているのは使用痕によるものか。82は加工した滑石製で、図左側の

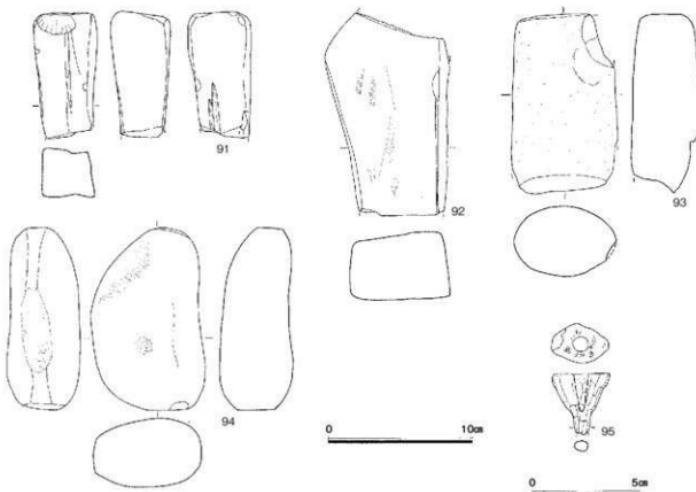


図18 SK04出土遺物実測図6 (91~94: 1/3, 95: 1/2)

抉り部分にはかすかに紐の使用痕が認められる。概ね長さ8~9cm前後で、石材は安山岩・砂岩等の自然石と滑石を使用している。83は断面三角形の一辺のみに太い抉りを入れている。砂岩系の石材である。84は他より大きな石材を用い、長い方の2側辺に抉りを入れている。

85~89は研磨で整えた小型の砲弾状の石材に溝を彫り込んだものである。溝は縦方向の両面に全周している。長さ6cm強のもの(85・86)、5cm弱のもの(87)、3cm未満のもの(88・89)の3種類の大きさがある。滑石のものと砂岩系のものがある。88は両面の中央をやや平坦にしている。89は溝が直線を成していない。90は直径5cmの紡錘車である。

91・92は砥石である。91はほぼ全面を使用し、図の表裏両面には研磨による筋状の凹みが数条ある。92は図の両面を使用しているやや大型の砥石である。研磨による擦痕が認められる。ともに砂岩系の石材を使用している。93は玄武岩製磨石斧で、最大幅7.7cm、厚さ4.9cmを測る。太形船刃石斧であろう。頭部の形態は扁平で、弥生時代中期の形態に近い。94は長さ12.5cm、幅7.5cm、厚さ5cmのやや大型の安山岩であるが、図の左側縁に敲打痕があり平坦化している。左上には斜方向に擦痕が多く認められる。また表面中央付近にもわずかに敲打痕らしきものがある。やや風化のため明瞭ではないが、全面研磨はしていないようで、基本的には敲くために使用した石器であろう。

95は滑石製の石製品で、全体が製塙土器のような器形をしており、細くなった棒状の部分は欠損している。上面の中央にはドリル状工具ではほぼ正円に孔が開けられ、孔は下部ほど狭くなり、約1.5cmの深さがある。器表面はノミ状工具で整形している。

SK08(図19、図版7)

調査区中央北東側で検出した。SK04の西側壁を切っている。平面形はほぼ円形で、長さ1.56m、幅1.46mを測る。南東側半分は二段掘りで深さ124cmを測る。底は径20cmと小さい。覆土は白色と褐色の細砂の互層で短期に埋没した自然堆積である。用途は不明。覆土の隨所から弥生土器が浅いコントナ1箱出土した。

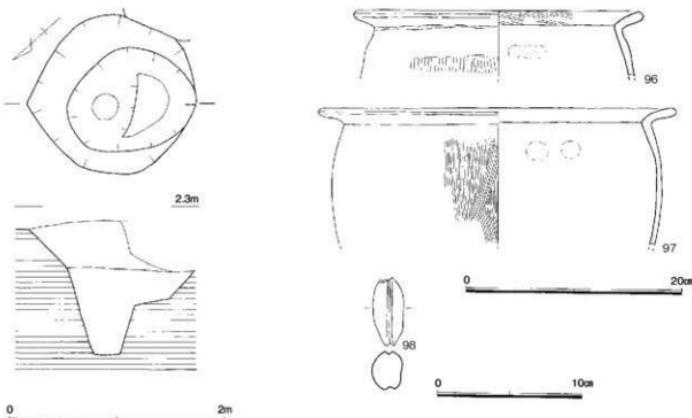


図19 SK08(1/40)及び同出土遺物実測図(96・97:1/4, 98:1/3)

出土遺物 (図19)

96・97は弥生土器の甕である。96は口径26.8cmを測る。口縁部・胴部にハケメを施し、胴上部はなで消しており、頭部にわずかにハケメの痕跡が残っている。97は口径33.0cmを測る。胴部に目の細かいハケメを施している。98は砲弾形の石錐である。図の右側縁は磨って平坦になっている。砂岩系の石材で長さ3.1cmを測る。

SK12 (図20)

調査区中央やや北西で検出した。SK14を切っている小さな土坑で、長さ0.73m、幅0.49m、深さ53cmを測る。弥生土器の小片が少量出土した。

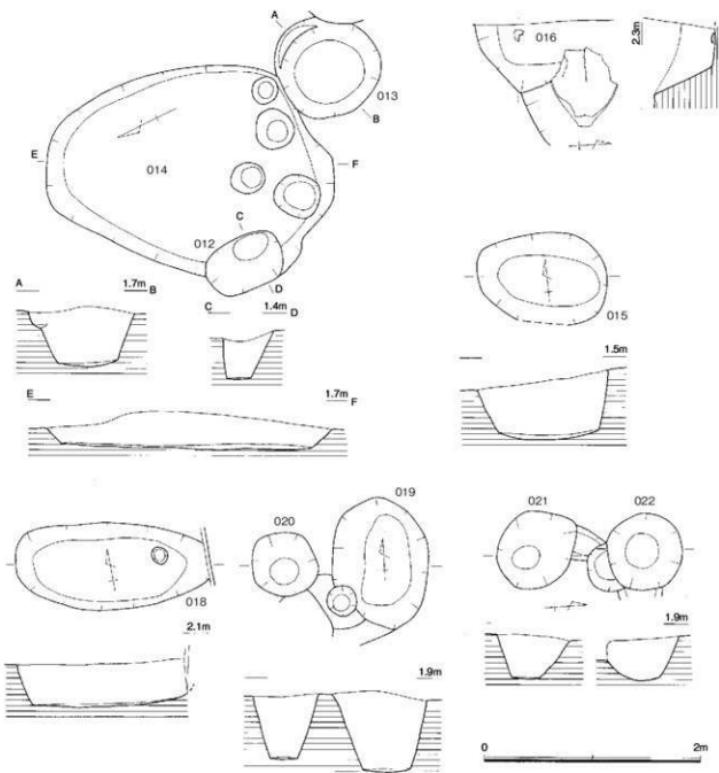


図20 SK12~16・18~22実測図 (1/40)

SK13（図20）

調査区中央近くで検出した。南東側の一部を擾乱に切られ、北西側はSK14を切っている。平面形はほぼ円形で、直径0.97mを測る。東側の一部は二段掘りである。全体の断面形は逆台形で、深さ57cmを測る。弥生土器が少量出土した。

SK14（図20）

調査区北側で検出した。SK12・13に切られ、SK04を切っていると思われるが、擾乱・土坑が入り組んで判然としない。全体卵形を呈し、長さ2.66m、幅1.94mで、深さは39cmと浅い。床面でピットを4基検出したが、この土坑との関連はわからない。

SK15（図20）

調査区南端近くのST17すぐ北側で検出した。ST17とわずかに切り合っているが、どちらが切っているかわからなかった。平面形は楕円形を呈し、長さ1.20m、幅0.85mを測る。断面形は逆楕円形で、深さは62cmを測る。

SK16（図20、図版7）

ST09の掘削過程で、ST09の西側で人間の頭蓋骨を検出したことは前述したが、その後に、周辺を精査した結果、土坑を検出した。土坑の覆土は地山である黄白色細砂に極めて近く、わずかに褐色を帯びている。北側は擾乱で切られている。土坑の西側は調査区外へと伸びているが、現状での平面形は長方形を呈し、長さ1m以上ある。断面は箱形で深さ55cmを測る。遺存していたのは頭蓋骨のうち頭頂部付近で、床面から数cm浮いていた。他に出土遺物はない。埋土の状況と、出土遺物が他にないことから、土壙墓の可能性も考えられる。

SK18（図20）

SK04の床面で検出した。SK04との関係はわからない。平面形は長楕円形を呈し、長さは約1.80m、幅0.80mを測る。断面形は箱形を呈する。形状から土壙墓の可能性もある。出土遺物は弥生土器の細片がごく少量出土した。

SK19（図20）

SK04中央付近の床面で検出し、土層断面を見ると、この土坑が埋没後にSK04が埋まっており、SK04に伴うのか、SK04以前の土坑である。南西端をピットに切られている。平面形は楕円形を呈し、長さ1.27m、幅0.88mを測る。断面形は逆台形を呈する。出土遺物は弥生土器の細片がごく少量出土した。

SK20（図20）

SK19すぐ西側で検出した。ピットに近い。平面形は円形で長さ0.60m、幅0.58mを測る。深さ60cmを測る。

SK21（図20）

SK19と同様にSK04に伴うのか、それ以前の土坑で、土坑というよりピットに近い。径0.7m強、深さ42cmを測る。

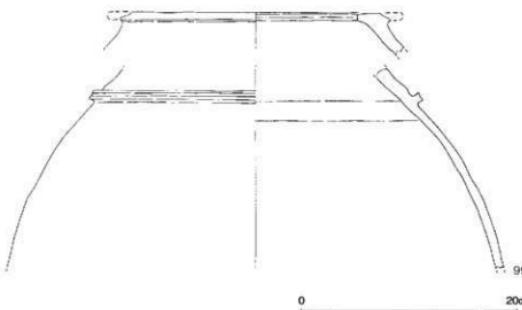


図21 SK25出土遺物実測図（1/4）

SK22 (図20)

SK21のすぐ北側で検出しSK21と同様。径0.70m、深さ41cmを測る。

SK25

調査区西壁中央付近で検出した。ごく一部の検出で、大半は調査区外へ伸び、全形・規模ともに不明である。弥生土器が少量出土した。

出土遺物 (図21)

99の2点は同一個体である。弥生土器の壺で、口径約28cmを測る。胴部は大きく張りだし、口縁部直下に断面四角形の突帯を1条巡らしている。調整はほぼ全面ナデ・横ナデである。

(3) 溝

SD02

調査区北西角で検出した。上部の多くを擾乱によって切られているため、全形は不明である。概ね北東-南西の方向に走っている。弥生土器が少量出土した。

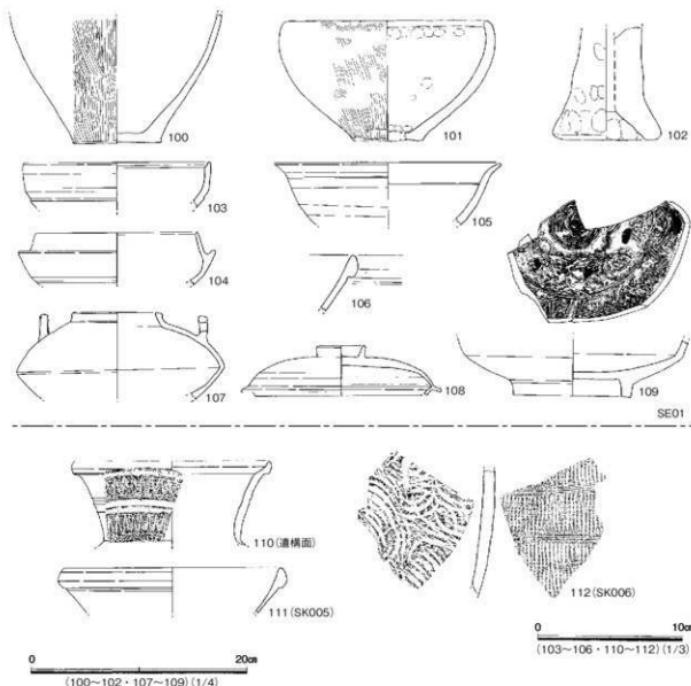


図22 SE01出土遺物及び擾乱等出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

SD10

調査区中央付近で検出した。北側を江戸時代の井戸SE01に切られ、南側をSK03を切っている。直線的な溝ではなく、平面形は出入りがある。弥生土器が少量出土した。

(4) その他の遺構・攪乱等出土遺物 (図22~24)

江戸時代後半の井戸・土坑や攪乱等からの出土遺物や遺構面・試掘時の出土遺物をまとめて報告する。調査区中央東側で江戸時代後半の井戸を3基検出したが、当初切り合いが解らずに、すべてSE01の番号を付し、途中からa・b・cの枝番号を付けた。最も南側のaはほとんどbに切られ、bは北側の一部をcに切られている。井筒が見つかったのはcのみで、瓦を積み上げていた。SE01からは江戸時代遺物の他、多くの弥生時代・古墳時代遺物が出土しており、その一部を図化した。

100~109はSE01出土である。100は弥生土器の壺で、底径8.1cmを測る。101は弥生土器の鉢で口径17.2cm、器高11.0cmを測る。外面はハケメ、内面は指押さえで仕上げている。102は弥生土器の器台で、脚径10.0cmを測る。103は須恵器の壺で、口径12.8cmを測る。104は須恵器の坏身で、口径11.0cmを測る。口縁部は長く、受け部は深い。口縁端部に重ね焼きの痕跡が残っている。105は白磁の碗で、口径15.6cmを測る。全面施釉で、釉調は灰白色を呈する透明釉である。106は玉縁の白磁碗である。全面灰白色釉を施している。107~109は江戸時代陶磁器の一部を掲載した。107は陶器の茶瓶である。注口は取れている。2箇所の突起部に把手を付けていたと思われる。濃緑色釉を施している。高取系か。108は白磁の蓋で、やや水色がかった白色釉を施している。109は陶器の鉢または深皿で、見込みのほぼ全面に象嵌を施している。文様は幾何文と草花文か。象嵌部分はベージュ色に近く、外面に不透明の茶色に近い褐色釉を施す。見込みには目跡が3箇所ある。

110は遺構面出土の須恵器の壺で、口径13.4cmを図る。外面に凸帯を挟んで二段の櫛描きの波状文を施している。111は005(攪乱)出土の玉縁の白磁碗で、口径15.4cmを測る。釉は灰白色の半透明で、素地は浅黄色を呈している。112は006(攪乱)出土で、須恵器の壺である。外面は平行タタキの一部を横方向にナデ消し、内面は同心円の当て具である。

113~128は幕末以降、そのほとんどが現代の穴から出土した遺物と試掘時の出土遺物である。113・114は弥生土器の壺である。115・116は弥生土器の壺で、ともに赤色顔料を塗布している。胎土に大粒の砂粒を含んでやや粗い。117は弥生土器の蓋。118は弥生土器の壺、119は器台である。120は弥生土器の壺で、口唇部に4本の短弦線を施している。121は器台の脚部。

122以降は江戸時代の遺物である。122は染付の皿で、見込に山水画を描いている。123は染付の碗。124は瓦質土器の火舎で、菊?のスタンプを押している。125は軒丸瓦で、いぶしが強い。126は染付の皿で、外底部に1羽、見込に1羽の鳥を、外面には3羽の鳥と束ねた巣状のものを描いている。127は陶器の蓋で、濃緑気味の褐色釉を施している。128は陶器製の瓶で、緑色気味の褐色釉を施している。

129はSE01出土で、砂岩系の石材を使った石錘である。長さ8.2cmを測る。130は現代の攪乱出土の玄武岩製磨製石斧で、片面を欠いている。131は005(攪乱)出土で、安山岩系の磨石である。磨いた跡はさほど明瞭ではないが、中央に敲打の痕跡がある。132以降は攪乱出土。132・133は安山岩系の石包丁。132は長さ12.7cmを測る。

IVまとめ

姫浜遺跡でこれまで5次の調査が行われているが、これまで旧石器時代・弥生時代中期・古墳時代

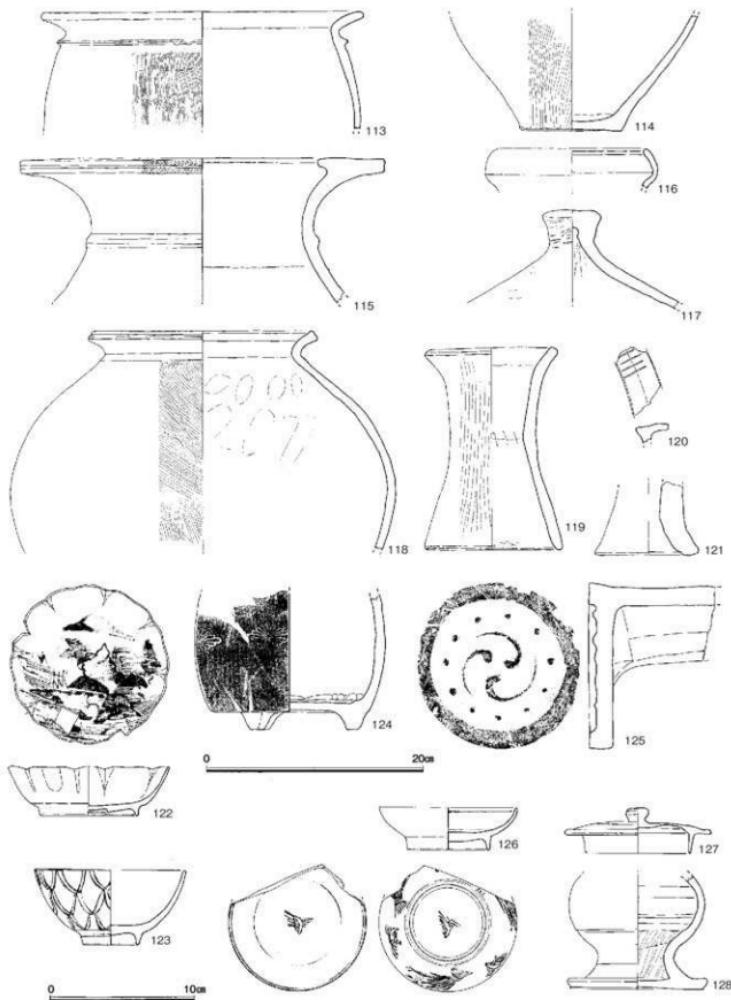


図23 摺乱・試掘出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

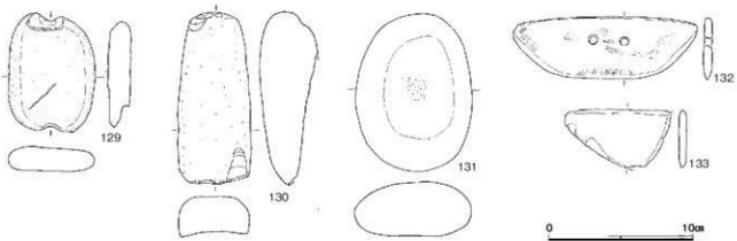


図24 掘乱出土遺物実測図（1/3）

前期・同後期・江戸時代の遺構・遺物が発見されている。このうち第3次調査で出土した尖頭状石器は、本来古砂丘を遺構面とする時期のものであるが、近年西新町遺跡で新期砂丘の下から古砂丘が発見され、さらに今山遺跡や西新町遺跡で新期砂丘の下から縄文海進期の曾畠式土器などが出土していることから、博多湾岸では、ほぼ新期砂丘の直下に古砂丘が残存している可能性が高いと考えられよう。また新期砂丘の形成時期は、今山遺跡の調査では約4500年前頃が考えられ、当遺跡においても今後、新期砂丘の下の遺跡にも注意を払う必要がある。

本調査区では弥生時代中期の壺棺5基と、中期の大型土坑2基などを検出した。このうち2基の大土坑については、住居址の可能性を捨てきれない。第5次調査でも同様の規模で、床面からやや浮いた位置で中期後半の土器群が大量に出土しており、同じような状況を呈している。本調査区の同時期の壺棺が大型土坑の壁面が斜めなのは、廃棄後に崩れたとも考えられる。床面から大量の土器群までの間には10cm以上の間層があるが、砂の自然堆積で、比較的短期間に埋まったものと思われ、土器群との時期差もさほどないものと考えられる。ただし、SK04ではそのすぐ上から6世紀前半代の須恵器が出土しており、さらなる検証が必要である。

SK03・04が住居とすると、第5次調査の住居と合わせて、大型の住居3軒と同時期の壺棺墓群が極めて近くに位置することとなる。壺棺墓群は丘陵の最も高い位置に東西方向に営まれ、住居群はそのやや北側の低い位置に築かれている。両土坑からは多くの石錐が出土している。海岸端の集落であることから、その生業の一端を示している。あわせて、3次調査で出土した若干の大陸系遺物も姪浜の集落の意味を考える上で、興味深いものがある。いずれにしろ遺跡の中での調査面積はまだ狭く、今後の調査を待ちたい。

前述の須恵器は6世紀前半代のもので、第3次調査では6世紀後半の住居が発見されているが、今回、本報告書の付編で第2次調査の概要を記しているが、その中で古墳の石室と思われる遺構があつたことが判明した。箱崎遺跡や博多遺跡でも砂丘上に古墳が築かれており、博多湾岸における古墳時代後期を考える上で、貴重な資料となろう。

博多湾岸にある遺跡の中で、中央部の藤崎・西新町遺跡、東部の箱崎・博多遺跡に比べ、姪浜遺跡や西部の今宿遺跡・今山遺跡は調査回数が少なく、遺跡内容の把握が難しかったが、ここ10年で今宿遺跡・今山遺跡それに本書が刊行され、その都度新しい知見が加わってきた。今回の調査や第5次調査も100m前後の小さな調査であるが、全体像を把握するために、今後も小さな資料の積み重ねが必要であることは疑いない。

表2 出土土器一覧

番号	遺物	位置・部位	種類	器種	部位	高さ	口径(径)	外側調整	内側調整	色調	胎土	焼成	備考
5 1	ST009		弥生土器	甕	全	45.6	35.4	ナデ ⁺	ナデ ⁺	にぶい褐色	4mm大の石英・白色・赤色粒	良好	
6 2	ST011		弥生土器	甕	全	45.6	35.4	ハケメ	ナデ ⁺	灰褐色～黄褐色	石英・白色粒・金雲母	良好	
7 3	ST017		弥生土器	甕	全	39.4	31.4	ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	褐色～棕色	石英・白色粒・金雲母	良好	003出土品と譲合
7 4	ST017		弥生土器	甕	全	41.8	30.8	ヘラナデ ⁺	ナデ ⁺	褐色～黒褐色	石英・白色粒	良好	口縁打ち欠き
8 5	ST023		弥生土器	甕	全	53.3	36.8	ナデ ⁺	ナデ ⁺	淡橙路～灰褐色	石英・白色粒	良好	
8 6	ST024	上蓋	弥生土器	甕	全	38.8	32.2	ヘラナデ ⁺ ・ハケメ ⁺	ナデ ⁺	明橙色	微細白色粒・金雲母	良好	
8 7	ST024	F甕	弥生土器	甕	全	31.9	30.1	ミガキに近いナデ ⁺	ナデ ⁺	明橙色	微細白色粒・金雲母	良好	
8 8	ST024		弥生土器	甕	口～胴	29.2		ハケメ	ナデ ⁺	淡橙色	白色粒・金雲母 多量	良好	
10 9	SK003 c.d		弥生土器	甕	口	30.6		ヨコナデ ⁺ ・暗えき	ヨコナデ ⁺ ・指揮	にぶい黃褐色	微細砂粒	良好	
10 10	SK003 c.d		弥生土器	甕	頭			ミガキ	ヨコナデ ⁺ ・暗えき	褐色	精良	良好	外側赤色顔料
10 11	SK003 a		弥生土器	甕	口	11.0		ハケメ ⁺ ・ナデ ⁺ ・シボリ	ナデ ⁺	褐色	段粒少量	良好	
10 12	SK003 AB間べルト		弥生土器	甕	胴			ミガキ	ナデ ⁺	褐色	大粒石英・白色・赤色粒	良好	
10 13	SK003 AB間べルト		弥生土器	甕	胴 (大)	49.4		ハケメ	ナデ ⁺	黄褐色～棕色	白色粒・石英・金雲母	良好	
11 14	SK003 a		弥生土器	甕	口～胴	41.6		板ナデ [?]	ナデ ⁺	黄褐色～棕色	白色粒・石英・金雲母	良好	
11 15	SK003 d		弥生土器	甕	口			ヨコナデ ⁺	ナデ ⁺	褐色	砂粒少量	良好	
11 16	SK003 c.d		弥生土器	甕	底	8.2		ハケメ	ナデ ⁺	灰黄褐色	大粒白色粒等多量	良好	
11 17	SK003 d		弥生土器	高环	口	24.0		ミガキ	ナデ ⁺	褐色	精良	良好	内面・口縁部赤色顔料
11 18	SK003 c		土製品	防護罩	口	直径54		ナデ ⁺	ナデ ⁺	褐色	精良	良好	未製品
13 26	SK004 R017' Q21		弥生土器	甕	口～胴	20.0		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	灰灰褐色	1mm大の白色粒多量	良好	
13 27	SK004 BC間べルト		弥生土器	甕	口～胴	28.0		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	淡黄褐色	やや大きめの白色粒多量	良好	
13 28	SK004 R12・13		弥生土器	甕	口～胴	22.6		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	淡黄褐色	微細白色粒多量	良好	
13 29	SK004 R05		弥生土器	甕	口～胴	29.8		ハケメ・ナデ ⁺	ナデ ⁺	淡黄褐色	石英・白色粒	良好	
13 30	SK004 R24		弥生土器	甕	口	27.8		ハケメ	ナデ ⁺	淡黄褐色	石英・白色粒	良好	
13 31	SK004 CR013		弥生土器	甕	口	28.4		ハケメ	ナデ ⁺	淡灰黄褐色	白色粒多量	良好	
13 32	SK004 R024		弥生土器	甕	口～胴	26.4		ハケメ・ナデ ⁺	ナデ ⁺	淡褐色	2mm大の白色粒多量	良好	
13 33	SK004 R12・13		弥生土器	甕	全	23.7	22.3	ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	白色粒多量	良好		
13 34	SK004 R013		弥生土器	甕	口～胴	25.7		ハケメ	ナデ ⁺	暗褐色	微細砂粒多量	良好	口脣部に2~3本を単位とする網縫刺あり
14 35	SK004 CR016		弥生土器	甕	口～胴	25.0		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	赤味の黄褐色	2mm大の白色粒多量	良好	
14 36	SK004 R017他		弥生土器	甕	口～胴	27.2		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	淡褐色	1mm大の白色粒多量	良好	
14 37	SK004 R012・13他		弥生土器	甕	全	32.1	28.7	ハケメ	ナデ ⁺ ・指揮さえ	淡黄褐色	白色粒・石英多量	良好	
14 38	SK004 C上		弥生土器	甕	口～胴	31.0		ハケメ	ナデ ⁺	褐色	石英・白色粒	良好	
14 39	SK004 R20		弥生土器	甕	底	7.4		ハケメ	ナデ ⁺	灰褐色	石英・白色粒多量	良好	
15 40	SK004 R21他		弥生土器	甕	底～胴	7.9		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	褐色～褐色	石英・白色粒	良好	
15 41	SK004 R017-2他		弥生土器	甕	底	9.2		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	黄色味の淡褐色	1mm大の白色粒多量	良好	
15 42	SK004 CD中層		弥生土器	甕	底	8.0		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	淡黄褐色	1mm大の白色粒多量	良好	
15 43	SK004 R012		弥生土器	甕	底	9.8		ハケメ	ナデ ⁺ ・指ナデ ⁺	黄褐色～灰色	3mm大の白色粒	やや不良	
15 44	SK004 R24		弥生土器	甕	底	8.4		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	褐色	石英・白色粒	良好	
15 45	SK004 R022' Q24		弥生土器	甕	底～胴	9.2		ハケメ	ナデ ⁺	灰褐色	やや大きめの白色粒多量	良好	
15 46	SK004 R10・07・09他		弥生土器	甕	底～胴	9.9		ハケメ	指揮さえ・ナデ ⁺	淡褐色	石英・白色粒	良好	
15 47	SK004 a上		弥生土器	甕	口	26.0		ミガキ	ナデ ⁺ ・ヨコナデ ⁺	褐色	精良	良好	両面赤色顔料
15 48	SK004 BC間べルト		弥生土器	甕	口	28.6		ナデ ⁺	ヨコナデ ⁺ ・ナデ ⁺	浅黄褐色	精良	良好	口縁部両面赤色顔料
15 49	SK004 c上層		弥生土器	甕	口	30.7		ヨコナデ ⁺ ・ミガキ	ナデ ⁺	浅黄褐色	精良	良好	両面赤色顔料
15 50	SK004 R20		弥生土器	甕	底	7.5		ハケメ	モレ	灰褐色	黒色粒子や多量	良好	底部焼成後穿孔
16 51	SK004		弥生土器	甕	口	9.4		ハケメ・ヨコナデ ⁺	ヨコナデ ⁺ ・モレ	褐色	1mm大の白色粒少量	良好	
16 52	SK004		弥生土器	甕	口	15.4		ハケメ・ヨコナデ ⁺ ・ナデ ⁺	ヨコナデ ⁺ ・モレ	褐色	精良	良好	

回	番号	造構	位置・層位	種類	器種	部位	高さ	口/底径	外面調整	内面調整	色調	胎土	焼成	備考
16	33	SK004		弥生土器	壺	口	15.6	ハケメ・ヨコナデ	ナデ	浅黄褐色	微細砂粒・金雲母	やや 不良		
16	54	SK004 cd		弥生土器	壺	腹		ヘタゞガキ	シボリ	橙色	精良	良好	外面赤色顔料	
16	55	SK004 cd		弥生土器	壺	胸		ヨコナデ	ナデ	橙色	微細砂粒	良好		
16	56	SK004 d		弥生土器	壺	底	6.5	ミガキ	ハケメ?	橙色	精良	良好	外面赤色顔料	
16	57	SK004 d		弥生土器	壺	底	6.0	ナデ	ナデ・指揮さえ	橙色	精良	良好	外面赤色顔料	
16	58	SK004 d		弥生土器	壺	底	8.4	ハケメ	指揮さえ・ナデ	浅黄褐色	精良	良好		
16	59	SK004 a		弥生土器	小壺	全	12.8	7.6	ハケメの後ついでないナデ	灰褐色	白色粒・石英、 金雲母	良好		
16	60	SK004 a		弥生土器	鉢	口～胴	14.4	ナデ	掌風	橙色	大粒砂粒多量	良好		
16	61	SK004 R23		弥生土器	鉢	全	11.8	19.6	ハケメ	指揮さえ	黄褐色	白色粒多量	良好	
16	62	SK004		弥生土器	鉢	全	4.3	9.2	ハケメ・ナデ	指揮さえ・ナデ	褐色	微細砂粒含む	良好	
16	63	SK004 A		弥生土器	壺	腹	7.5	ハケメの後ナデ	ナデ	明褐色	微細白色粒少量	良好	外面赤色顔料	
16	64	SK004 A		弥生土器	壺	腹	14.0	ハケメ	シボリ・ケズリ	橙色	精良	良好	外面赤色顔料	
16	65	SK004 D		弥生土器	壺	全	18.4	12.8	ハケメ	指揮さえ・ナデ	淡橙色	微細石英、白色 粒	良好	
16	66	SK004 b/c		弥生土器	壺	腹	7.8	ナデ	指揮さえ・ナデ	にぶい黄褐色	微細砂粒	良好		
16	67	SK004 a		弥生土器	壺	腹	11.6	ハケメ	ハケメ・指揮さえ	にぶい黄褐色	微細白色粒子	良好		
16	68	SK004 c上層		弥生土器	壺	腹	10.0	10.0	指揮さえ・ナデ	ナデ	橙色	微細砂粒	良好	
16	69	SK004 cd上層		弥生土器	壺	腹	14.0	ハケメ	板付・しきり	浅黄褐色	微細白色粒子	良好		
16	70	SK004 BCベルト他		須恵器	环蓋	口～体	11.4	同軸・タケズ リ・同ナデ	同軸ナデ	黒灰色～灰褐色	微細石英、白色粒	良好	天井部に自然釉	
16	71	SK004 C		須恵器	环	口～体	11.2	同軸・タケズ リ・同ナデ	同軸ナデ	濃い灰褐色	微細石英、白色粒	良好		
16	72	SK004 a		土製品	投擲斧	FF2.2	長3.5	ナデ			明赤褐色	微細金雲母	良好	
16	73	SK004 a		弥生土器	鉢	全	約2.5	2.2	指揮さえ	指揮さえ	褐色	微細砂粒	やや 不良	
19	96	SK008		弥生土器	壺	口	26.8	ハケメ・ヨコナ デ	ナデ	浅黄褐色	微細白色粒子	良好		
19	97	SK008		弥生土器	壺	口	33.0	ハケメ・ヨコナ デ	ナデ	にぶい黄褐色	微細砂粒	良好		
21	99	SK025		弥生土器	壺	口	約28	ヨコナデ・ナデ	ナデ	橙色	精良	良好		
20	100	SE001 C		弥生土器	壺	底	8.1	10.8	ナデ	淡黄褐色	石英、白色粒	良好		
22	101	SE001		弥生土器	鉢	全	11.0	17.2	ハケメ	指揮さえ・ナデ	浅黄褐色	石英、白色粒	良好	
22	102	SE001		弥生土器	壺	口～脚	10.0	指揮さえ	指揮さえ	橙色	3mm以下の赤 色、白色粒子、 石英、長石	良好		
22	103	SE001		須恵器	壺	口	12.8	同軸ナデ	同軸ナデ	灰色	微細白色粒子	良好		
22	104	SE001		須恵器	环身	口	11.0	同軸ナデ	同軸ナデ	灰色	微細白色粒子	良好		
22	105	SE001		白磁	碗	口～胴	15.6	~	~	灰白色釉	灰白色、黑色粒 含む	良好		
22	106	SE001		白磁	碗	口	~	~	~	灰白色釉	灰白色	良好		
22	107	SE001 A他		陶器	茶瓶	上半施釉	8.3	~	~	濃赤褐色	茶色	良好		
22	108	SE001 A		白磁	蓋	4.6	18.4	はば全面施釉	ナデ	水色気味白色	白色、砂粒含む	良好		
22	109	SE001 A		陶器	皿	10.8	10.8	はば全面施釉	象眼文	不明褐色	茶色	良好		
22	110	遺構		須恵器	壺	口	13.4	同軸ナデ	同軸ナデ	灰色	微細白色粒子	良好	櫛刷波状文	
22	111	005発乱		白磁	碗	口	15.4	~	~	灰白色不透明釉	浅黄色、白色粒 含む	良好		
22	112	006発乱		須恵器	壺	胴		平行タキキ・ナ デ消し	同心円あて具	灰色	白色・黑色粒子	良好		
23	113	発乱		弥生土器	壺	口～胴	29.7	ハケメ・ヨコナ デ・ヨコナデ	ナデ	橙色	精良	良好	背面赤色顔料	
23	114	発乱		弥生土器	壺	底	9.4	ハケメ	ナデ	灰褐色	石英、白色粒、 金雲母	良好		
23	115	発乱		弥生土器	壺	口	33.6	摩減	ナデ・ヨコナ デ	橙色	大粒白色粒子等 や多量	良好	口縁部背面赤色 顔料	
23	116	発乱		弥生土器	壺	口	13.6	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	大粒砂粒多量	良好	口縁部赤色顔料	
23	117	発乱		弥生土器	蓋	天井	ナデ	ナデ	ナデ	橙色	精良	良好		
23	118	発乱		弥生土器	壺	口～胴	21.2	ハケメ	指揮さえ・ナデ	淡黄褐色	石英、白色粒	良好		
23	119	発乱		弥生土器	壺	全	18.6	12.2	ハケメ	指揮さえ・ナデ	淡橙色	微細石英・白色 粒	良好	
23	120	発乱		弥生土器	壺	口	~	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	微細砂粒	良好	口縁部に4本継割	
23	121	発乱		弥生土器	壺	口	9.5	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	微細砂粒	良好		
23	122	発乱		染付	皿	全	4.5	14.8	はば全面施釉	青色気味白色	白色、砂粒含む	良好	見込みに山水	
23	123	発乱		染付	碗	全	3.2	10.4	はば全面施釉	青色気味白色	白色、砂粒含む	良好		
23	124	発乱		瓦質土器	火鉢	近底	14.3	研磨	工具によるナデ	黑色	金雲母・砂粒含む	良好	表面に菊のスター ン	
23	125	発乱		軒丸JL	瓦頭	15.2	工具によるナデ	ケズリ	黒褐色	精良	良好			
23	126	発乱		染付	皿	全	2.9	~	~	青色気味白色	白色、砂粒含む	良好	鳥などを描く	
23	127	発乱		陶器	蓋	近底	3.1	10.0	体部施釉	濃赤褐色	青色気味白色	良好		
23	128	発乱		陶器	蓋	近底	9.6	外底部以外施釉	~	青色気味綠色	淡青色、薄褐色	良好		

表3 出土石器一覧

図	番号	遺構	位置・層位	種類	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
11	19	SK003	CD間ベルト	石鍬	凝灰岩?	97	53	28	2295	
11	20	SK003	CD間ベルト	石鍬	砂岩系	9	70	34	2734	
11	21	SK003	CD間ベルト	石鍬		119	70	50	5803	
11	22	SK003	01	石鍬	凝灰岩?	84	53	13	1194	
11	23	SK003	d	石鍬	滑石	54	46	19	673	
11	24	SK003	CD間ベルト	磨石		112	87	37	5832	
11	25	SK003	d	砥石		129	87	37	1228	
17	74	SK004	CD間ベルト	石鍬	川原石	87	82	27	2397	
17	75	SK004	A	石鍬	滑石	88	78	26	2720	
17	76	SK004	A	石鍬	川原石	97	60	26	2389	
17	77	SK004	トレンチ	石鍬	滑石	92	66	24	2154	
17	78	SK004	CD間ベルト	石鍬	安山岩?	87	57	28	2227	
17	79	SK004	A	石鍬	安山岩?	93	61	25	2170	
17	80	SK004	トレンチ	石鍬	砂岩系	75	61	35	3064	
17	81	SK004	A	石鍬	川原石	78	67	27	2129	
17	82	SK004	A	石鍬	滑石	81	59	26	1853	
17	83	SK004	検出面	石鍬	砂岩系	8	43	37	1944	
17	84	SK004	R021-2	石鍬	川原石	103	53	25	2239	
17	85	SK004	R019	石鍬	滑石	65	30	30	792	
17	86	SK004	R026	石鍬	滑石	61	29	24	584	
17	87	SK004		石鍬	川原石	47	13	11	84	
17	88	SK004	B	石鍬	滑石	26	19	0.9	49	
17	89	SK004	013	石鍬	砂岩系	29	19	1.9	103	
17	90	SK004	ベルト下層	結縫車		50	0.5	264		
18	91	SK004	C	砥石	硬質砂岩	36	33	2403		
18	92	SK004	R004	砥石		86	45	10166		
18	93	SK004	R25	研削石斧	玄武岩	77	49	7689		
18	94	SK004	CD間ベルト	敲石	安山岩?	125	75	50	8484	
18	95	SK004	A	石製品	滑石	28	26	18	9.3	
19	98	SK008		石鍬	砂岩系	31	14	1.7	9.3	
24	129	SE001	C	石鍬	砂岩系	82	59	16	1204	
24	130	漫乱		磨製石斧	玄武岩	107	49	30	364.6	
24	131	漫乱		磨石		108	80	3.7	537.0	
24	132	漫乱		石魔芋	安山岩系	127	48	0.6	51.7	
24	133	漫乱		石魔芋	安山岩系			0.5	25.3	

付 姪浜遺跡第2次調査概要報告

昭和54年11月9日、姪浜町の旧唐津街道で下水道工事が行われ、甕棺が出土したとの一報が福岡市教育委員会文化課へ持たらされた。当時文化課職員であった柳田純孝が急速かけつけ、複数の甕棺が出土しているのを確認した。工事主体者であった福岡市下水道局と交渉し、発掘調査の必要性を説いたが、下水道局は調査の重要性については認識したもの、すでに発注・工事中であることから、早期の調査着手と工事との平行調査を主張した。文化課においても、当時は地下鉄建設に伴う発掘調査に職員の主力を投入し、他の発掘現場も多く展開しており、職員が割けない状態であった。そのため、結果的には、昼間に別現場の調査を行い、夜間に下水の工事に先立って重機で遺構の検出を行い、遺構が見つかれば、そのまま夜間調査を行うこととした。調査は臨時的かつ緊急的に行われたもので、十分な調査が行えたとは言い難いが、真冬の夜間であり、また昼間に別の調査を行った後であったにもかかわらず、20基以上の甕棺を取り上げた、柳田純孝を始めとする当時の職員の労苦には頭が下がるとともに、本概要報告に当たって聞き書きをした当時の職員に感謝を申し上げたい。

この調査が第4次調査の前面道路における調査で、多くの甕棺が出土していることから、付編として、この時の調査（第2次調査）の概要を報告するが、残念ながら遺構図面の若干数が見つからず、参加した職員の記憶も薄れがちで、全体の遺構の把握は不可能であったため、ここでは一部の遺構図・写真を掲載するに留めざるを得ない。また遺物については甕棺を中心にかなりのコンテナがあるが、多くが未実測である。ただし当市職員の濱石哲也を始めとする数名が、調査後の詳細な整理用のノートにメモをとっておられたため、そのメモの内容を一部整図した。

調査に当たっては、西から工事区間に合わせてⅠ区、ⅡA区～ⅡD区としている。11月9日に甕棺が出土したのはⅡA区である。ⅡA区では工事立会等もあったため詳細な図はないが、20基以上の甕棺が出土している。この区の東側は東西方向が多いが、西側に行くと南北方向を主軸とするものが多くなる。通常の甕棺の他、口縁部打ち欠きのもの、石蓋を有するもの、丹塗り土器を用いたものなど、第4次調査でも見られるものがある。ⅡB区でも9基の甕棺が出土し、その多くが東西方向である。成人棺は9基中2基と少ない。ここでは古墳の石室と思われる遺構が検出されている。参加職員の聞き書きではっきりしなかったが、図中には古墳石室とあり、袖石と方形区画の配石遺構等から古墳の石室と思われる。この東5mほどのところに南北方向の溝があり、あるいは古墳の周溝の可能性も考えられるが時期不明。石室の規模は長さ、幅ともに2.5m前後であろうか。時期等は不明。

ⅡC区になると遺構が激減する。最も西の端で甕棺の破片が1基と東端近くでピットが2基検出されただけである。ⅡD区では遺構は発見されていないようである。Ⅰ区では、Ⅱ区寄りで数基の甕棺が出土している。西端近くでは南北方向の2基の溝が検出されている。

最終的に検出した甕棺の数は明瞭ではない。次頁に、担当者の数人が甕棺を整理した際の一覧表を掲示している。取り上げた甕棺番号は、その日ごとに番号を付しているらしく、それを日付・地区ごとにまとめると、同じ日の同じ地区で番号が跳んでいるところがあるが、その部分が存在したものとすると、Ⅰ区が2基、Ⅱ-A区24基、Ⅱ-B区では16基となる。図25にⅡ-B区の遺構配置図を掲載しているが、ここにあるのは8ないし9基である。当初検出時以外に、だめ押しで最後に甕棺を検出したものが多かったものと思われる。Ⅱ-C区以東にはない。

今回は出土遺物の点検までは出来なかつたが、整理ノートにある程度詳細な記録が残っており、それをまとめると、出土した甕棺のうち、整理ノートに記載があるのは、下記の表の通りである。この

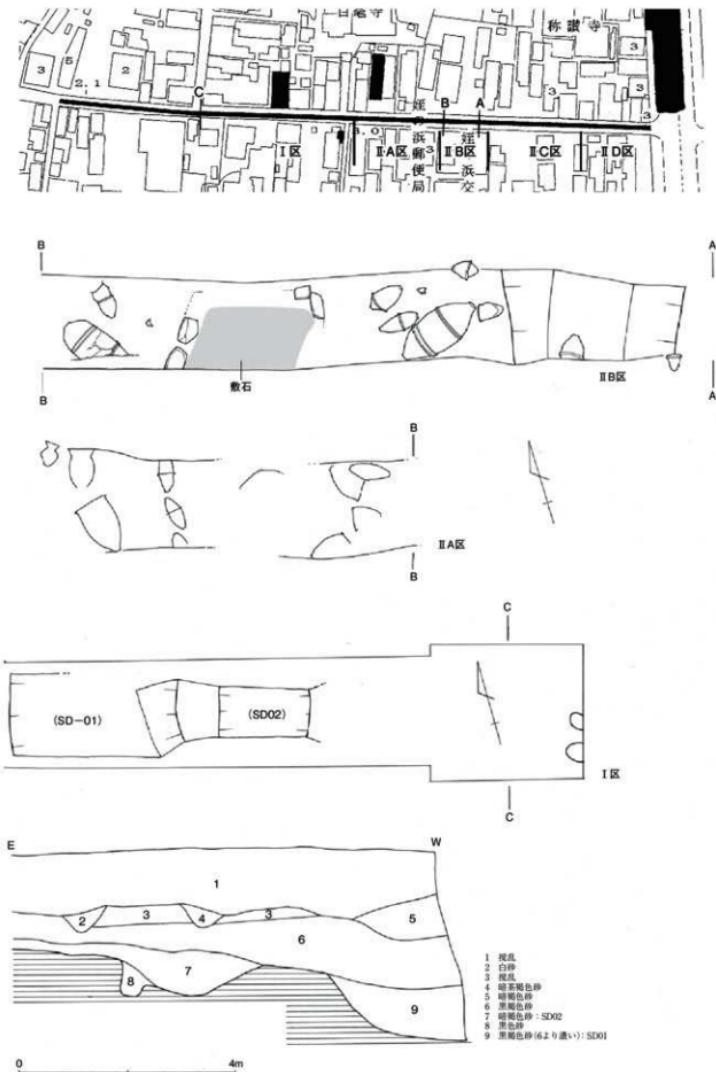


図25 姪浜遺跡第2次調査遺構配置図及び遺構図（最上図のみ1/2,000・他は1/80）

表4 姪浜遺跡第2次調査発掘一覧

No.	取上日	地点	名称	種別	備考	No.	取上日	地点	名称	種別	備考
	791109	II-A	K-2	上	成人鉢	1. 2号地點					
	791109	II-A	部分品				16	800229	II-B	K-1	上
	791110	II-A			不明	3号地點周辺	17	800229	II-B	K-1	下
	791112	II-A	K-1			口縁部	18	800229	II-B	K-2	上
	791112	II-A	K-4	上	1袋		19	800229	II-B	K-2	下
	791112	II-A	K-4	下	1袋		20	800229	II-B	K-3	不明
	791112	II-A	K-5	下	1袋		21	800229	II-B	K-3	不明
	791112	II-A	K-5	上	袋なし		22	800229	II-B	K-4	上
1	791127	II-A	K-1		小児鉢	丹後引、底部欠	23	800229	I-C	K-1	上
2	791127	II-A	K-1	下	小児鉢		24	800229	I-C	K-1	下
	791127	II-A	K-2	上	小児鉢		25	800303	II-B	K-1	上
3	791127	II-A	K-3	上	小児鉢		26	800303	II-B	K-1	下
4	791127	II-A	K-4	上	小児鉢		27	800303	II-B	K-2	上
	791127	II-A	K-4	上	小児鉢	下無し、取り上げられず	28	800303	II-B	K-2	下
	791127	II-A	K-5	上	成人鉢		29	800304	II-B	K-1	上
5	791127	II-A	K-5	下	成人鉢		30	800304	II-B	K-1	下
	791127	II-A	K-6			単棺	31	800304	II-B	K-2	不明
6	791127	II-A	K-7			大壺	32	800304	II-B	K-3	単棺
34	791127	II-A	K-1	下	小児鉢		33	800306	II-B	K-5	上
39	791127	II-A	K-2	上	小児鉢		34	800306	II-B	K-5	下
40	791127	II-A	K-5	上			35	800306	I-B	K-1	上
7	791129	II-A	K-1	上	小児鉢		36	800306	I-B	K-1	下
	791129	II-A	K-1	下			37	800306	I-B	K-1	上
8	791129	II-A	K-2		成人鉢	単棺	38	800306	I-B	K-1	下
38	791129	II-A	K-3			単棺	39	800306	I-B	K-1	上
	791129	II-A	K-3			上と同?	40	800306	I-B	K-1	下
	791129	II-A	K-3				41	800306	I-B	K-1	上
9	791129	II-A	K-4	上	小児鉢		42	800306	I-B	K-1	下
35	791129	II-A	K-4	下	小児鉢		43	800306	I-B	K-1	上
10	791129	II-A	K-5	上	成人鉢		44	800306	I-B	K-1	下
11	800130	I-B	K-1	上	成人鉢		45	800306	I-B	K-1	上
12	800130	I-B	K-1	下	成人鉢		46	800306	I-B	K-1	下
13	800228	II-B	K-1	上	小児鉢		47	800306	I-B	K-1	上
14	800228	II-B	K-1	下	小児鉢		48	800306	I-B	K-1	下
	800228	II-B	K-2	上	成人鉢		49	800306	I-B	K-2	上

うち表の各行の頭に番号を振っているものは略図が描かれており、その一部を図26に掲載した。この略図を見ると、出土した甕棺は弥生時代中期前半のものがごく少数あるが、大半は中期中葉から末までのもので、後期のものを含まない。これは他の調査地点の状況や生活址や包含層の出土遺物から見ても矛盾しない。そのほか東西の溝や包含層などからも弥生土器が出土し、古墳時代と思われるた壺もまとめて数点出土している。

以上の状況から、甕棺は第4次調査付近が分布を中心に、第1次調査のやや西側から、現在の姪浜交番の列のやや東側あたりまでが分布域である。その外側には極めて少数しかない。甕棺群は砂丘の最も高い地点に築かれている。甕棺域の西側に大きな溝が2条、東側に1条ある。西側の溝は弥生時代遺物を包含している。西の溝の外（西側）では遺構は検出されておらず、東の溝の外（東側）では遺構が極端に減少する。東溝の東に位置する第3次調査では、この調査が行われた道路の北側から遺構が検出され、逆に甕棺の中心地区的やや南にある第1次調査では甕棺が発見されており、第2次調査の結果とその後の調査・試掘で、概ね甕棺・生活域の分布域が明らかになったと言えよう。

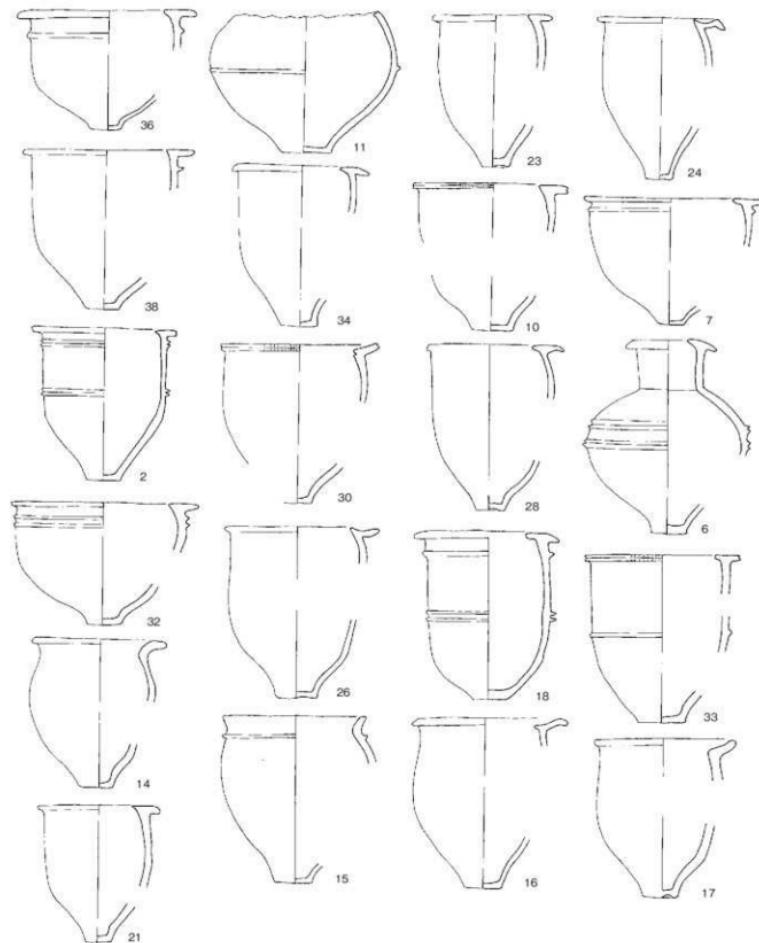


図26 姪浜遺跡第2次調査出土甕棺模式図

この図は姪浜遺跡第2次調査の整理ノートに記載されている甕棺の略図をトレースしたものである。図は、口縁部などを誇張して描かれており、縮尺は不統一である。トレースにあたっては、ほぼ原図どおりに行ったが、一部誇張しそうしている部分などを修正した。図中の番号は表4の番号と一致する。



①調査区全景（南から）



②調査区全景（北から）

図版2



①ST09 (北から)



②ST11 (北から)

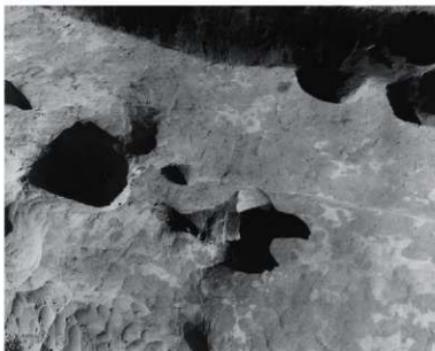


③ST11櫛棺取上後 (北から)

図版3



図版4



①SK03（東から）



②SK03土層断面1



③SK03土層断面2



①SK04周辺土坑検出状況（北から）



②SK04遺物出土状況（北から）

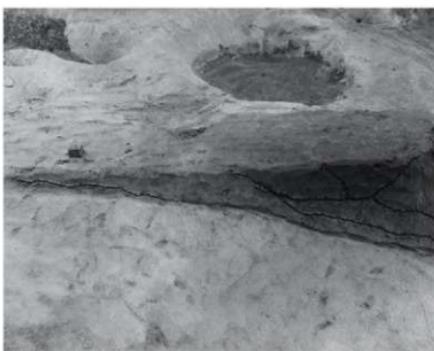
図版6



①SK04全景（北から）



②SK04土層断面1



③SK04土層断面2

図版7



①SK08（北東から）

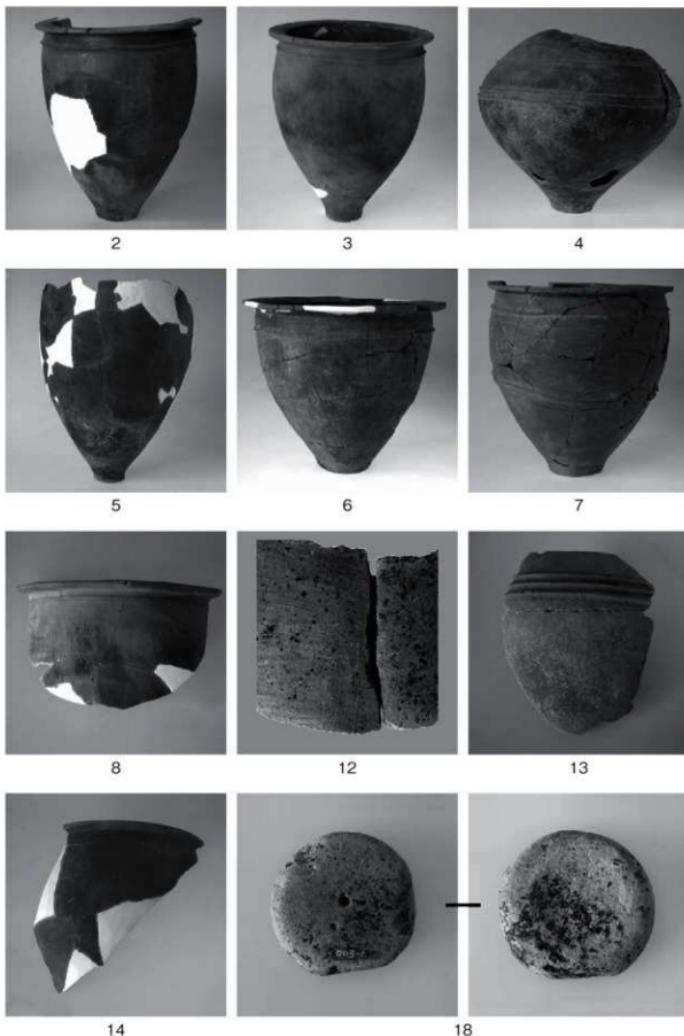


②SK16（東から）

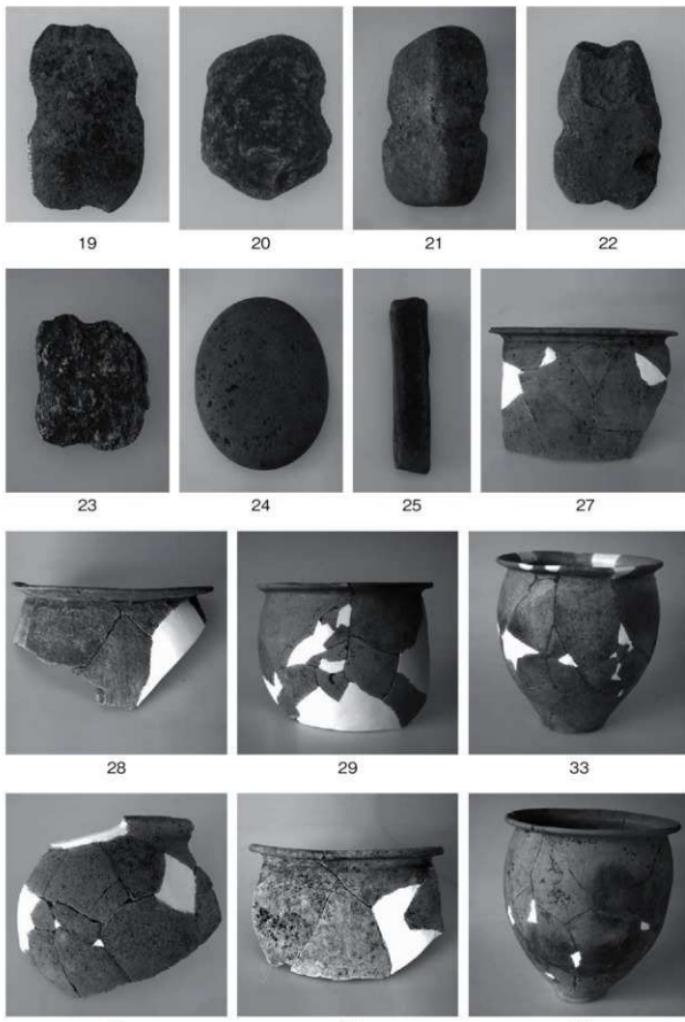


③SK16人頭骨出土状況

図版8



出土遺物1



出土遺物2

図版10



38



39



40



44



45



46



48



59



65



70

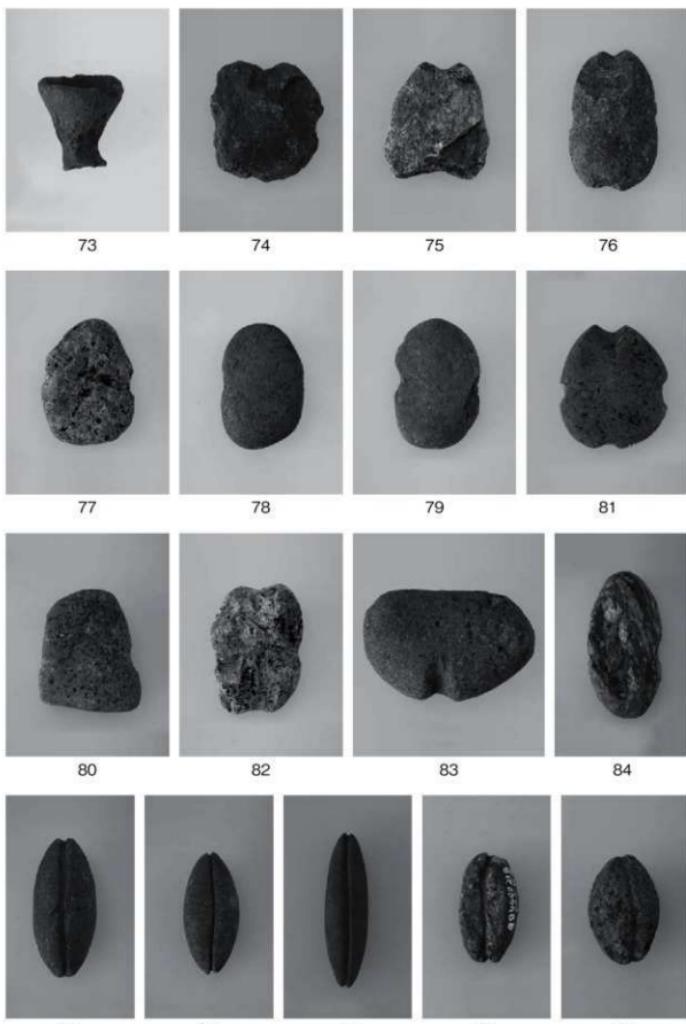


71



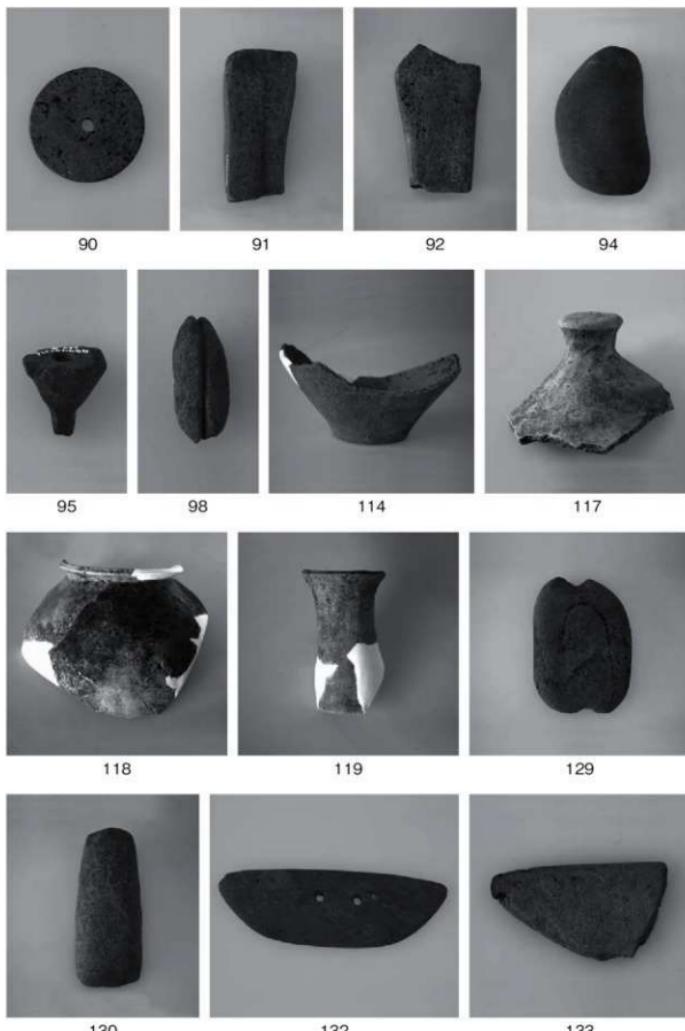
72

出土遺物3



出土遺物4

図版12



出土遺物5



第2次調査の状況

図版14



第2次調査甕棺出土状況

報告書抄録

ふりがな	めいのはまいせき				
書名	姪浜遺跡				
副書名	第4次調査の報告				
巻次	3				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第1058集				
編著者名	米倉秀紀				
編集機関	福岡市教育委員会				
発行機関	福岡市教育委員会				
発行年月日	20090331				
作成法人ID					
郵便番号	810-0001	電話番号	092-711-4667		
所在地ふりがな	ふくおかしにしきめいのはまさんちょうめさんさんきゅうさん				
遺跡所在地	福岡市西区姪浜3丁目3393				
市町村コード	40135	遺跡番号	0367		
北緯	33° 35' 17"				
東経	131° 19' 34"				
調査期間	1991101-19981126				
調査面積	119m ²				
調査原因	住宅建設				
種別	墓地・集落				
主な時代	弥生時代中期・江戸時代				
遺跡概要	遺構	弥生時代中期：妻棺5・大型土坑2・土坑12・溝2 江戸時代後期：井戸3・土坑 時期不明(中世？)：土塙墓？1			
	遺物	弥生時代：弥生土器・石鍤・防護車・石包丁・磨製石斧 古墳時代：須恵器 中世：白磁・銅鏡 江戸時代：磁器・陶器			
特記事項	弥生時代の妻棺の内1基は、石で囲んでいる。大型土坑2基は住居址の可能性もある。石鍤が多く出土し、海浜部の集落の生業形態がかいま見れる。				

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1058集

姪浜遺跡3 -第4次調査の報告-

2009年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

